

佐久市埋蔵文化財報告書 第92集

周防畑遺跡群

辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂
辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2001.3

佐 久 市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書 第92集

周防畑遺跡群

辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂
辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2001.3

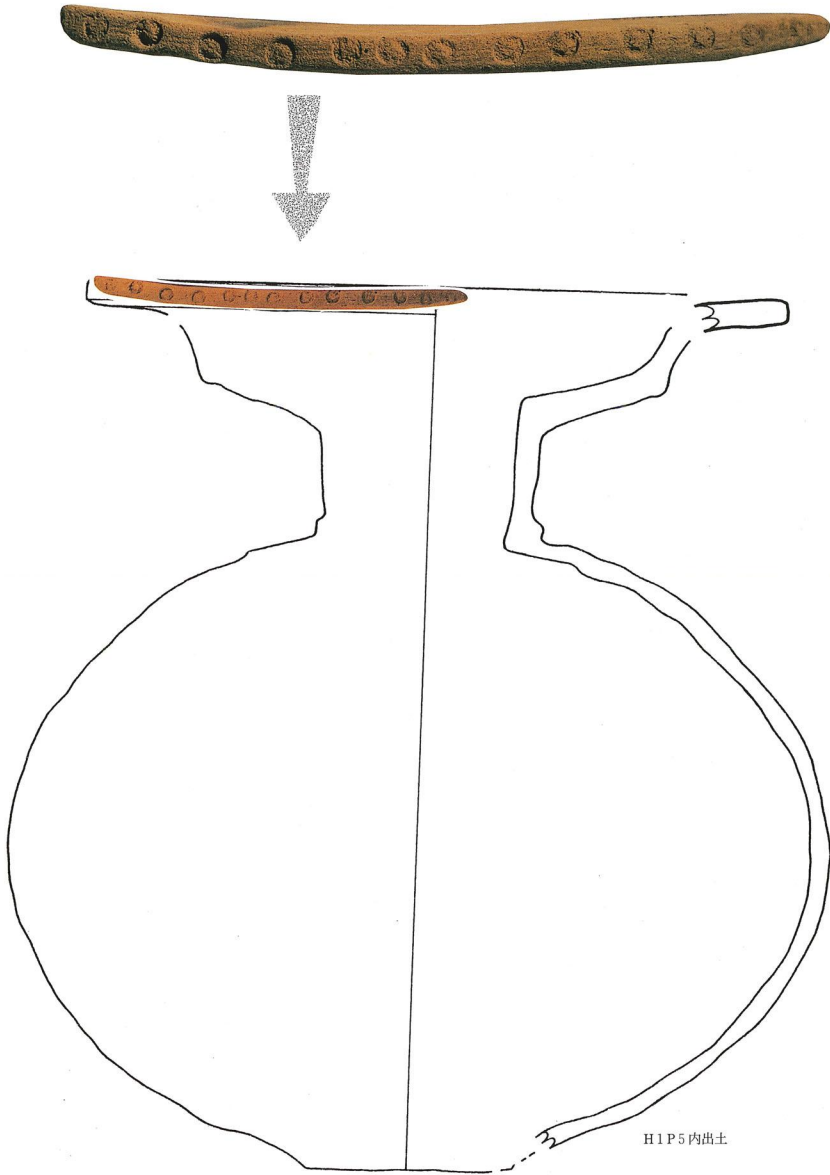
佐 久 市
佐久市教育委員会



辻の前遺跡Ⅱ H1号住居址付近近景
小海線をはさみ浅間山を望む



中仲田遺跡Ⅱ M1・M2号付近近景
水田地帯を北に向かう市道1-125号線

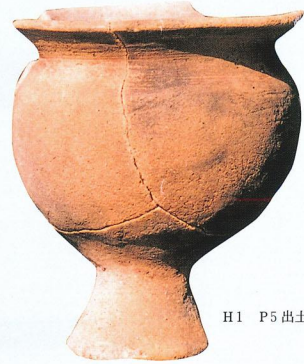


佐久市では初例の「二重口縁壺」
口唇部の形態から神奈川県平塚市「南原B遺跡」出土のものを図上復元



H2

炉2の西脇床面出土
佐久市2例目の「ひさご壺」
赤色塗彩が施されている



H1 P5出土

赤色塗彩が施された
「小型の台付甕」



H1

P1(主柱穴)内より
ほぼ完形で出土した「鉢」



H3

P4内より出土した壺
この口縁部内面に付着した
木材状の物質は「骨」と分析された



H3

あでやかに赤色塗彩された「壺」

例 言

- 1 本書は、市道-125号線の道路改良事業に伴い、平成12年度に行った辻の前遺跡Ⅱ、中仲田遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。整理作業・報告書刊行は平成13年度に行った。
- 2 調査委託者 佐久市
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名および所在地
周防畑遺跡群 辻の前遺跡Ⅱ (STSⅡ)
周防畑遺跡群 中仲田遺跡Ⅱ (SNAⅡ)
佐久市大字長土呂辻の前1534-4 (辻の前遺跡Ⅱ)
佐久市大字長土呂字仲田1561-4 (中仲田遺跡Ⅱ)
- 5 調査期間・面積
辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱは、以下の期間で同時平行して調査・整理を行った。
発掘調査 平成12年11月13日～平成12年12月1日
整理調査 平成13年1月9日～平成13年3月31日
面 積 辻の前遺跡Ⅱ 240㎡
中仲田遺跡Ⅱ 490㎡
- 6 分析・鑑定は以下に依頼した。
パリノ・サーヴェイ株式会社
辻の前遺跡Ⅱ H3号住居址P5内覆土のリン・炭素分析 他
- 7 本書の編集・執筆は佐々木宗昭が行い、報告書作成にあたっては以下の分担によって行った。
遺物洗浄 中嶋 照夫
遺物復元 桜井 牧子 澤井 皐月
図面修正 浅沼ノブ江 江原 富子 神津ツネヨ 細萱ミスズ
遺物実測 小林 真寿 出澤 力 浅沼ノブ江 江原 富子 神津ツネヨ 細萱 ミスズ
トレース 小幡 弘子
尚、第Ⅳ章第1節、本文中の出土遺物は富沢一明が執筆した。
- 8 縄文土器については、小林真寿の教示を頂いた。
- 9 本書および辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱのすべての資料は、佐久市教育委員会で保管されている。

本調査にあたり、株式会社田中住建および地元の方々には数々の御協力・ご援助を頂きました。

また、報告書作成にあたっても多くの方々よりご指導・ご助言を賜り厚く御礼を申し上げます。

記して感謝の意を表します。

凡 例

1 遺構の略号は以下のとおりである。

竪穴住居址-H 土坑-D 溝状遺構-M

2 挿図の縮尺は原則として以下のとおりであり、スケールを付した。

竪穴住居址-1/80 土坑-1/60 溝状遺構-遺構各に挿図中に明記。

土器-1/4 石製品-1/4 拓本-1/4

3 遺構の海拔標高は、各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。

4 口絵(巻頭図版)の遺物写真の縮尺は、原則として1/3とした。但し、巻頭図版四の「小型の台付甕」は1/2で示した。

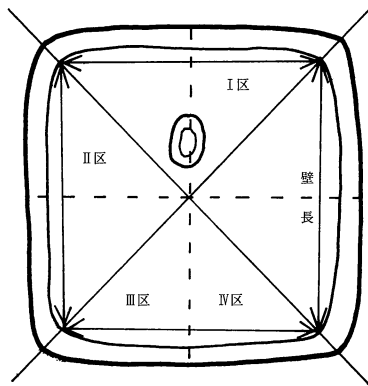
5 写真図版の遺物縮尺は、個々に明記した。

6 写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。遺物番号は簡略化し、例えば第10図1は10-1とした。

7 土層の色調は、1998年度版『新版標準土色帳』に基づいた。

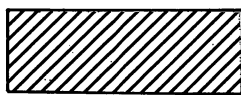
8 調査区グリッドは、公共座標に従い間隔は4×4 mに設定した。

9 遺構規模の測定は、以下のようにした。

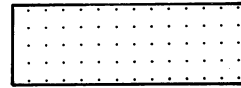


10 挿図中のスクリーントーンは、以下のことを示す。

<遺構>



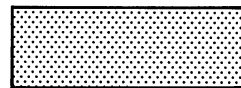
地山断面



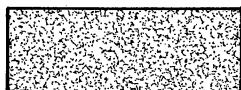
赤色塗彩



床下埋土



床面段差



焼土



柱痕



灰

目 次

巻頭カラー

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

- 第1節 調査の経緯と経過1
- 第2節 調査の体制2
- 第3節 調査日誌2

第Ⅱ章 遺跡の環境

- 第1節 自然的環境3
- 第2節 歴史的環境3

第Ⅲ章 基本層序と概要

- 第1節 基本層序7
- 第2節 発掘区と検出遺構11

第Ⅳ章 辻の前遺跡Ⅱの遺構と遺物

- 第1節 竪穴住居址15
- 第2節 土抗29
- 第3節 溝址30
- 第4節 表採遺物30

第Ⅴ章 中仲田遺跡Ⅱの遺構と遺物

- 第1節 溝址31
- 第2節 表採遺物32

付 編

辻の前遺跡Ⅱ出土弥生時代土器の内容物について

図 版

挿図目次

- 第1図 辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ位置図1
- 第2図 周辺遺跡位置図5
- 第3図 辻の前遺跡Ⅱ 基本層序模式図7
- 第4図 中仲田遺跡Ⅱ 基本層序模式図8
- 第5図 辻の前遺跡Ⅱ
中仲田遺跡Ⅱ 発掘区設定図9
- 第6図 辻の前遺跡Ⅱ 全体図13
- 第7図 中仲田遺跡Ⅱ 全体図14
- 第8図 H1号住居址実測図16
- 第9図 H1号住居址実測図17
- 第10図 H1号住居址炉址実測図18
- 第11図 H1号住居址出土遺物実測図19
- 第12図 H1号住居址出土遺物実測図20
- 第13図 H1号住居址出土遺物実測図21
- 第14図 H2号住居址実測図22
- 第15図 H2号住居址炉址実測図23
- 第16図 H2号住居址出土遺物実測図24
- 第17図 H3号住居址実測図25
- 第18図 H3号住居址炉址実測図26
- 第19図 H3号住居址出土遺物実測図27
- 第20図 H3号住居址出土遺物実測図28
- 第21図 D1号土抗実測図29
- 第22図 M1号溝址実測図30
- 第23図 表採遺物実測図30
- 第24図 M1号溝址実測図31
- 第25図 M2号溝址実測図32
- 第26図 M3号溝址実測図32
- 第27図 表採遺物実測図32

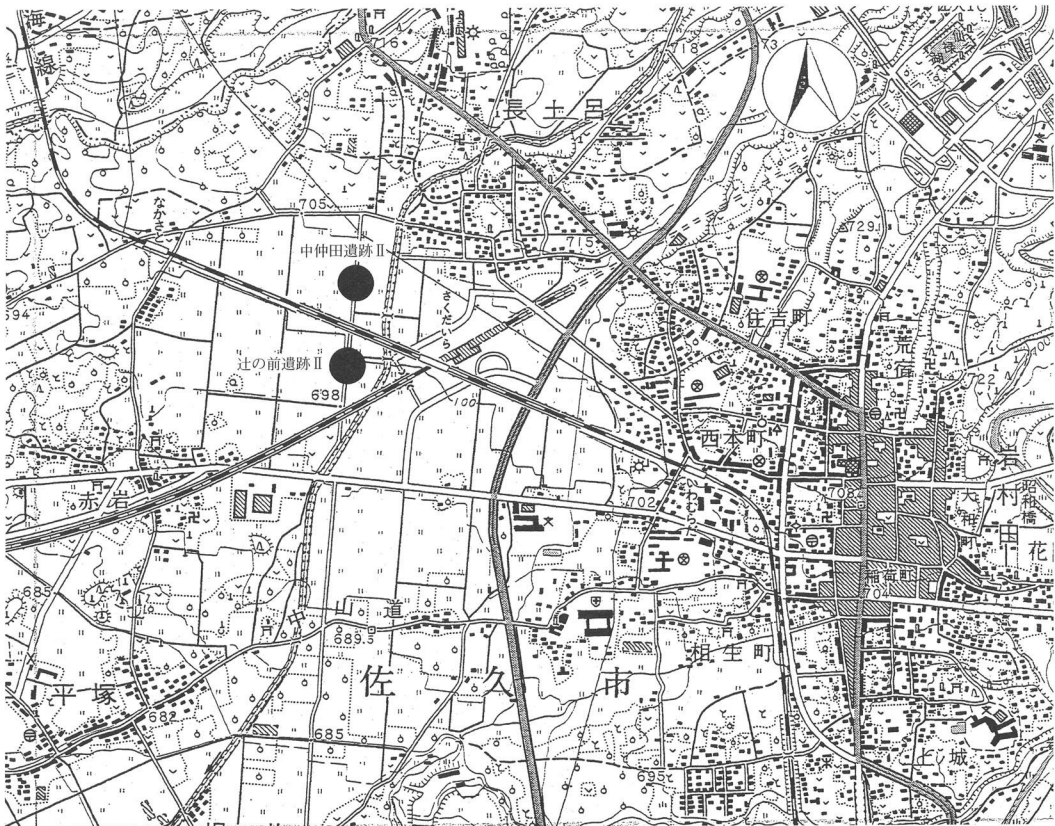
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過

辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱは、佐久市長土呂地籍に所在し周防畑遺跡群の西端部に位置する。両遺跡は佐久市の北部に位置し、標高は700m内外を測る。新幹線「佐久平駅」の西側約100mの地点に市道1-125号が水田地帯を南北に横断しており、辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱは本道路に面して所在する（第5図）。

近年、本遺跡に隣接した東側に新幹線及び小海線の「佐久平駅」が建設され、周辺は大規模な区画整理事業が進み、日々その姿は変貌している。この事業に伴い清水田遺跡、円正坊遺跡、下伯母塚遺跡他の発掘調査が行われ古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が多く検出されている。

今回、佐久市建設部による市道1-125号線の道路改良事業が本遺跡内において計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、佐久市教育委員会文化財課において記録保存を目的とする発掘調査が実施されるはこびとなった。



第1図 辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ位置図（1：15000）

第2節 調査体制

調査受託者教育長	依田 英夫			
教育次長	小林 宏造			
文化財課長	草間 芳行			
文化財係長	萩原 一馬			
文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 真寿	羽毛田卓也
	富沢 一明	上原 学	山本 秀典	出澤 力
調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子		
調査副主任	堺 益子			
調査員	浅沼ノブ江	江原 富子	神津ツネヨ	細萱ミスズ
	荒井ふみ子	柏原 松枝	小林まさ子	真嶋 保子
	澤井 皐月	渡辺 長子	中嶋 照夫	中嶋 良造
	菊池 喜重	菊池 康一	西田 豊	

第3節 調査日誌

- 2000・11・15 重機による表土剥ぎ。現場への機材を一部搬入。剥いだ表土をダンプで搬出。
- 11・16 重機による表土剥ぎ。排土をダンプで搬出。
- 11・17 重機による表土剥ぎ。排土をダンプで搬出。遺構検出作業・M1の調査・記録終了。
- 11・20 重機による表土剥ぎ。排土をダンプで搬出。H1号プラン確認・掘り下げ。H2号を確認。
- 11・21 H1・H2号の掘り下げ。H3号址のプラン確認。重機による表土剥ぎ。排土を搬出。
- 11・22 H1・H2・H3の調査。ダンプで搬出。
- 11・23 重機「中仲田遺跡」へ移動・表土剥ぎ。H1・H2・H3の調査。
- 11・24 H2調査・記録終了。H1・3の調査。
- 11・27 H1・3号址の調査。中仲田の表土剥ぎが終了し重機・ダンプの作業終了(11・25)。
- 11・28 H1・3号址の調査。中仲田M1・M2調査。
- 11・29 H3号址調査・記録終了。H1調査。
- 11・30 H1号址調査終了。中仲田M1・M2終了。
- 12・1 両遺跡の調査総て終了し、機材の撤収。



第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

佐久平の北方には、現在も火山活動を続けている浅間山が聳えている。浅間山の活動は、原始・古代より現代の人々の生活環境にも大きな影響を及ぼしている。浅間山の南・西麓には塚原泥流（約23,000年前）、第一軽石流（約14,000～13,000年前）、第二軽石流（約12,000～11,000年前）、追分火砕流（1,108＝平安時代）が分布している。第一軽石流（P1）・第二軽石流（P2）の分布域では、南・南西・西方に向けて放射状に伸びる「田切り」地形が顕著である。しかし、この西方に向けて伸びる「田切り」は今回調査を行った佐久平駅の付近でみかけじょう消滅し、本周辺から西側には田切りの谷より押し出された堆積土によって形成された低湿地が広がる。昭和40年代後半までこの低湿地には塚原泥流により形成された残丘が島状に存在したが、現在では大規模な圃場整備による水田風景が広がり、かつての面影をとどめていない。だが、一見まさに平坦に見えるこの水田地帯の下は激しい凹凸が存在し、低地には1～2 m強の泥炭質土層や洪水砂層が堆積している。近年発掘調査された濁り遺跡（第2図No.36）・松の木遺跡（第2図No.38）・中長塚遺跡（第2図No.44）など、本遺跡に近い周辺遺跡からは古代の水田址に関連する遺構が見つかっており、この付近は古代からの連綿とした一代米生産地帯といえよう。

こうした古代水田址は、かねてから田切り地形の低地部分や、濁り川流域の低地に推測されていた。しかし、その大半は大規模な水田圃場整備事業によって新しい水田下に埋没してしまった。濁り遺跡・松の木遺跡・中長塚遺跡などから検出された水田址は、その圃場整備事業が及ばなかった地帯での発見であった。

今回、発掘調査を行った辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱからは、古代の水田址などは検出されなかったものの現水田下の隆起する低地層の地形を考えると圃場整備済みの水田下にも古代の水田、および、それに関連する遺構・遺物が破壊されずに残存している可能性が十分に考えられる。

第2節 遺跡の歴史的環境

まず、辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱが所在する周辺の遺跡を地形的に概観すると、長土呂及び塚原、更に岩村田の南西部・浅間中学校付近では、低湿地や塚原泥流による残丘上に多くの遺跡が見られる。藤塚遺跡群や常田居屋敷遺跡群などがそれである。また、本遺跡から北東にかけて展開する「田切り」地形が顕著な一帯の台地上においても数多くの遺跡がある。その一例としては聖原遺跡他がある。

さて、先土器時代及び縄文時代の遺跡は本遺跡の周辺を含めた佐久平の平坦部では、今日までに確認されていない。しかし、本遺跡から北西約800 mの地点には西近津遺跡群があり、多くの縄文中期の土器が表採される。このことから本群内においては縄文時代の遺跡が存在していることが十分に考えられる。

次に弥生時代の遺跡としては中期に入り、低湿地を取り囲むように大規模な集落が形成され始める。湯川の段丘上にある北西ノ久保遺跡は当期の佐久平を代表する遺跡である。竪穴住居址92軒が確認された他、後期後半と考えられる木棺墓・方形周溝墓などが検出されている。また、後期の集落としては、本遺跡の北側約400 mの至近距離にある周防畑B遺跡があげられる。当遺跡は濁り川流域の低湿地に続く微高地上にあり

住居址・円形周溝墓他が調査されている。更に今回調査を行った地点から北東1 kmの箇所には下聖原遺跡Ⅱがあり、弥生時代後期の竪穴住居址内から、米、大麦、小麦、豆類などが出土している。そして、調査地の南西約800 mの地点には、濁り遺跡が所在する。本遺跡からは平安時代の水田址よりはるかに古い水田土壌層が検出され、弥生時代の土器片が出土している。よって、この濁り遺跡で観察された古い水田土壌層は、下聖原遺跡Ⅱから検出された米・大麦他を踏えて推考すると弥生時代の水田址と考えられる。

古墳時代になると、前期や中期の松ノ木遺跡・清水田遺跡のように大規模な集落は姿を消し、5～6軒程度の集落しか検出されなくなる。このことは平成12年度に調査が行われた、深掘遺跡からも同様なことがいえ佐久平一円に現れる現象である。今回調査が行われた辻の前遺跡Ⅱからは当概期の古墳時代前期にあたる竪穴住居址3軒が検出された。当遺跡から西方の流れ山が分布する一帯では、古墳時代前期の小規模集落がみられ、先述した常田居屋敷遺跡などがそれである。古墳址は北西ノ久保遺跡より中期～終末期までの方墳・円墳が検出されている。そのうち径24 mの円墳からは、多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪他が出土している。集落規模が増大するのは後期にはいつてからであり、上聖端遺跡・下聖端遺跡などで集落が検出されている。

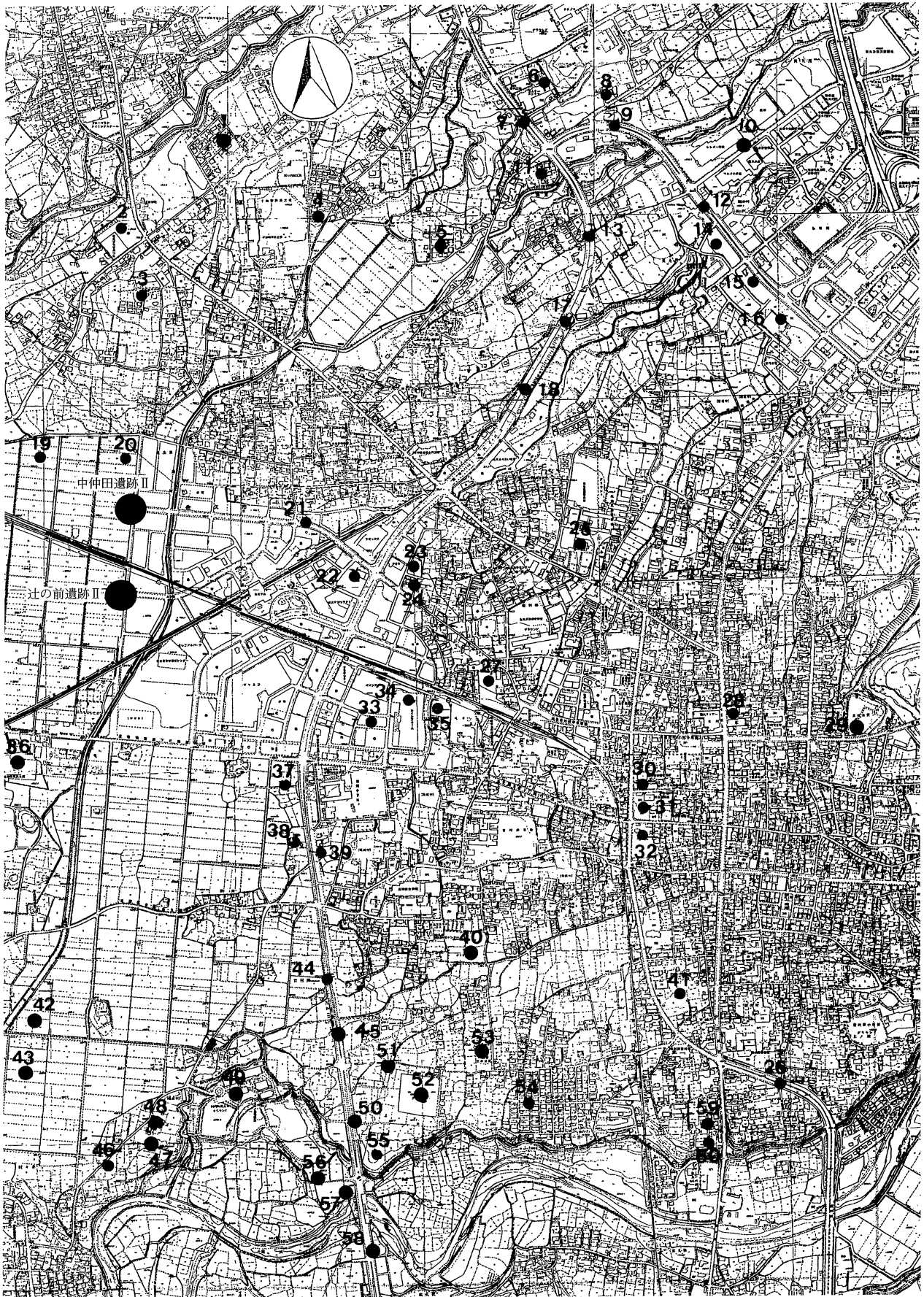
次に、奈良・平安時代では、長土呂遺跡群聖原遺跡があり、大規模な佐久流通業務団地建設に伴い調査面積97,000 m²が調査された。その結果、古墳時代後期から平安時代末までの竪穴住居址970軒以上・掘立柱建物址860棟以上などが検出された。遺物も円面硯・石印「伯万私印」・瓦塔・八稜鏡・帯金具などが出土している。また、濁り川を挟んだ台地上には芝宮遺跡群があり、海獣葡萄鏡や銀鉾の馬具などが出土した。そして、その西には周防畑遺跡群があり、大和川原寺の「川原寺式」とよばれる瓦の特徴を持った軒丸瓦が出土している。この瓦は7世紀末と考えられるもので、古代佐久の中心的な場所とも考えられ、佐久の律令期における群衛・群寺などの発見に期待がかかる地域である。

中世以後としては、北西ノ久保遺跡の南側に隣接した地に鎌倉中期から後期の五輪塔などから成る石塔婆がある。館跡としては長土呂地籍に方形の地籍割を持ち、近代までに土塁・濠が一部残存した長土呂館跡があったが、その成立時期など詳細は不明である。この館跡から南東約700 mとほど近い距離に「直路」の地籍があり「直路遺跡」が所在している。当遺跡からは、中世時代の井戸址・ピット・溝址などが検出されている。ことによると、「直路＝スクジ」の字名は『長土呂館跡』と関係を持った中で付けられた地名であろうか。

城館跡としては、中世に活躍した大井氏の本拠地として推定される大井城跡（石並城・王城・黒岩城）が岩村田市街東端の湯川段丘上にある。このうちの黒岩城は昭和58年に一部調査が行われ、15～16世紀と推定される掘立柱建物址や竪穴状遺構が検出された。出土遺物は、石臼・国産陶磁器・船載青白磁器などが出土した。しかし、これらの遺構は城の主要部の建物ではなく、周辺の城に付随した工房址的な遺構であったことが指摘されている。

この岩村田の町は中世より大井氏の城下町として栄えていたが、文明16年（1484）村上氏による兵火のため、灰燼と帰したことが『四隣譚藪』に記されている。よって、現市街地の地下には中世町並が当時の状態で埋没している可能性がある。

近世にはいると、江戸幕府により整備された「中仙道」が岩村田市街を通過し、宿場町が形成された。当時の建物はほとんど残されていないが現在でも地割りにその面影を残している部分もある。



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 15000)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	縄	弥	古	奈	平	中	調査年度	備考
1	北近津遺跡	長土呂字北近津		○	○				昭和46年度	
2	西近津遺跡	長土呂字西近津		○	○				昭和46年度	
3	若宮遺跡	長土呂字若宮			○	○	○		昭和58年度	
4	周防畑遺跡A	長土呂字南下北原				○	○		昭和54年度	
5	高山遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下高山			○				平成5～6年度	
6	芝宮遺跡第2次	長土呂字北中中原	○	○	○	○	○		昭和55年度	
7	上高山遺跡	長土呂字高山			○				平成元～3年調査	
8	下曾根遺跡Ⅱ・Ⅳ	佐久市小田井							平成10～11年度	
9	南上中原・南下中原遺跡Ⅱ	長土呂字南上中原、南下中原			○	○	○		昭和63、平成5年調査	
10	聖原遺跡Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ	長土呂字上聖端、新城他			○	○	○		平成元～7年	
11	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字芝宮			○	○			昭和62・63、平成2年調査	
12	下聖原遺跡	長土呂			○	○	○			
13	上聖原遺跡	長土呂字上聖端	○		○	○	○		昭和63年度	竪穴住居址、堀立柱建物址、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構
14	聖原遺跡X	長土呂字上聖端	○		○	○	○		昭和63年度	住居址、堀立柱建物址、土坑、溝
15	曾根新城遺跡Ⅰ	岩村田字下穴虫					○	○	平成元～6年度	住居址他
16	中久保田遺跡	岩村田字中久保田、下久保田		○	○	○	○			
17	下聖端遺跡Ⅲ	長土呂下聖端			○				平成4年度	
18	下聖端遺跡Ⅱ	長土呂下聖端		○	○	○	○		昭和63、平成元年度	
19	周防畑遺跡B	長土呂字大豆田下中田他		○	○				昭和54年度	竪穴住居他
20	周防畑遺跡B	長土呂字大豆田下中田他	○	○	○	○	○		昭和55年度	円形周溝墓他
21	上前田遺跡	長土呂						○	平成8年度	中世井戸・土坑・ピット
22	下伯母塚遺跡	長土呂						○	平成8年度	中世井戸・土坑
23	直路遺跡Ⅰ	岩村田字直路水引		○				○	平成10年度	竪穴住居址、井戸址、溝、土坑、ピット群
24	直路遺跡Ⅱ	岩村田字直路水引		○				○	平成10年度	竪穴住居址、井戸址、溝、土坑、ピット群、竪穴遺構
25	批把坂遺跡	岩村田字批把坂					○	○	昭和55年度	
26	上ノ城遺跡	岩村田字上ノ城上丹過他	○	○	○	○	○		昭和48年度上ノ城他	
27	円正坊遺跡Ⅰ	岩村田字円正坊田中他	○	○	○	○	○		昭和59年度一部調査	
28	中宿遺跡	岩村田字中宿			○			○	平成9年度	住居址、竪穴建物址、土坑、墓坑、特殊遺構
29	大井城遺跡	岩村田字古城他			○			○	昭和55・59年度	
30	内西浦遺跡Ⅰ	岩村田字内西浦		○	○			○	平成元年～2年度	竪穴住居址1、竪穴状遺構7、土坑15、井戸址6、堀立柱建物址
31	内西浦遺跡Ⅱ	岩村田字内西浦						○		
32	柳堂遺跡	岩村田字柳堂		○				○	平成10年度	住居址、建物址、溝状遺構、円形周溝、柱穴、土坑
33	清水田遺跡Ⅱ	岩村田字清水田			○					住居址他
34	清水田遺跡Ⅰ	岩村田字清水田		○	○				昭和53年度	
35	円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊田中他	○	○	○		○		平成8年度	
36	濁り遺跡	佐久市大字塚原字濁り						○	平成4年度	水田址
37	松ノ木遺跡Ⅱ	岩村田字松ノ木		○	○	○	○	○		
38	松ノ木遺跡Ⅲ	岩村田字松ノ木		○	○				平成8年～	竪穴住居址
39	松ノ木遺跡Ⅰ	岩村田字松ノ木		○	○				平成10年度	古墳・溝・土坑
40	宮ノ西遺跡	岩村田字宮ノ西		○	○	○	○		昭和58年度宮ノ西	
41	観音堂遺跡	岩村田字観音堂						○	平成9年度	ピット他
42	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚		○					昭和48年度西一里塚・餅田	
43	餅田遺跡	岩村田字堰向							昭和48年度	溝3、水路1、(近代)
44	中長塚遺跡	岩村田字中長塚		○					平成8年度	塚跡、水田址、木製鋤
45	西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田		○	○	○	○	○	平成9年～10年度	
46	鳴沢遺跡	根々井字沢五里田東原他		○	○	○	○		本調査	
47	五里田遺跡	根々井字五里田	○	○	○				平成9年度本調査	竪穴住居址・円形周溝墓、方形周溝墓他
48	上鳴沢	根々井字上鳴沢		○					平成3年度試掘調査	住居址1、円形周溝墓1
49	北西ノ久保遺跡	岩村田字北西ノ久保		○	○	○	○	○	昭和57年～60年度	住居址158、周溝17、周溝墓、木棺墓他
50	西一本柳遺跡Ⅰ	岩村田字西一本柳		○	○	○	○	○	平成3年～4年度	
51	西一本柳遺跡Ⅱ	岩村田字西一本柳		○	○	○	○	○	平成3年～10年度	住居址、堀立柱建物址、土坑、溝
52	西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田字西一本柳		○	○	○	○	○	平成3年～10年度	
53	北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳		○		○	○		昭和47年度	住居址16、土坑51
54	北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳		○		○	○		昭和47年度	
55	西一本柳遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	岩村田字西一本柳		○	○	○	○	○	平成3年～10年度	住居址、堀立柱建物址、土坑、溝
56	中西久保遺跡Ⅲ・Ⅳ			○	○	○	○	○	平成4年～10年度	住居址、堀立柱建物址、土坑
57	中西久保遺跡Ⅰ	岩村田字中西久保		○	○	○	○		平成4年～10年度	住居址85、堀立柱建物址、土坑、溝、ピット
58	仲田遺跡	猿久保字仲田			○	○	○		平成7年度	住居址30、堀立柱建物址9、花卉双蝶、八花鏡
59	上ノ城丹過遺跡	岩村田字丹過				○	○		昭和54年度	
60	西四日町遺跡	岩村田字西四日町			○	○	○		昭和58年度	住居址他

第Ⅲ章 基本層序と概要

第1節 基本層序

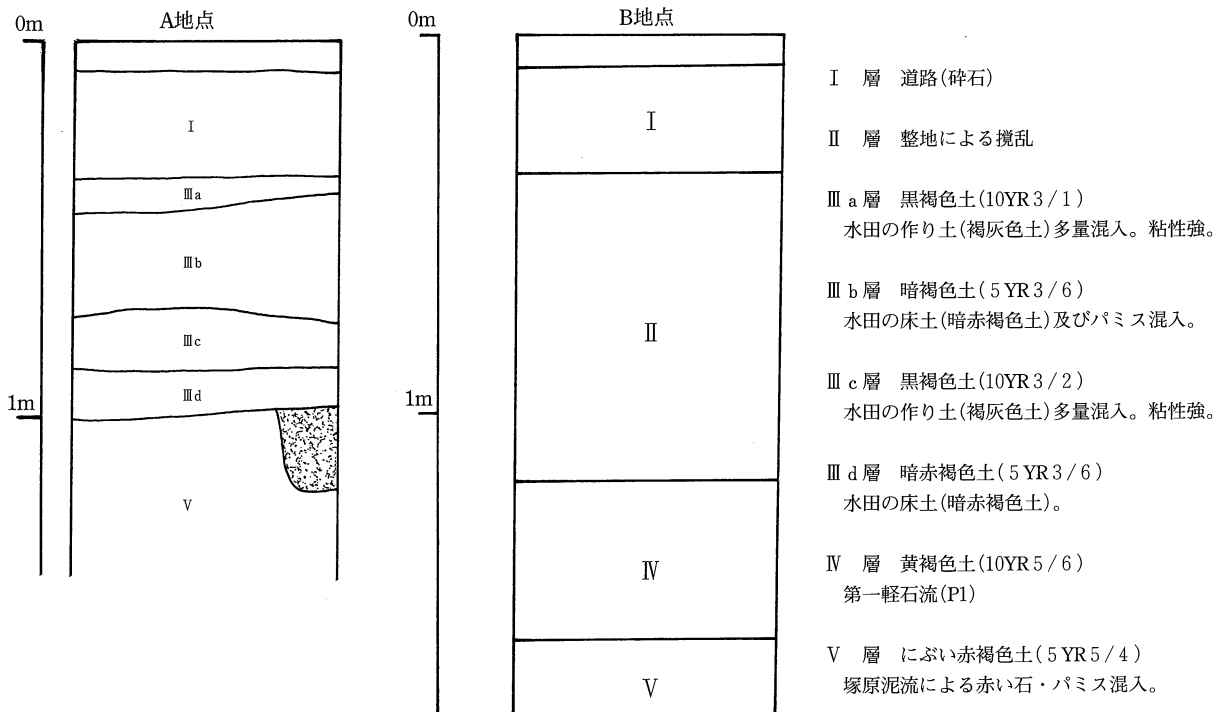
(1) 辻の前遺跡Ⅱ

辻の前遺跡Ⅱは、標高699～698 mを測り、北から南にゆるやかに傾斜している。本遺跡の基本層序は調査区の北側と南側は異なる。下に示した3図A地点は、発掘調査区の北側で、B地点は南側で土層観察をしたものである。Ⅰ層は道路(市道1-125号線)の基礎部分による攪拌土である。Ⅱ層は整地による攪乱。Ⅲ層は近世及び現代の水田耕作土の層であり、a～dの4層に分けられる。a・c層は基本的に水田耕作によるゆるい作り土で、b・dの層はその作り土の下層部にあたる床土の層である。Ⅳ層は第一軽石流(P1)の層である。Ⅴ層は、にぶい赤褐色土を主体とする塚原泥流層で、調査区の中央には泥流による巨石がみられる。

本遺跡の遺構確認面は、A地点第Ⅲ層の塚原泥流層の上部面、及びB地点の第Ⅳ層第一軽石流(P1)層から検出されることが確認された。この第一軽石流は調査区の南側に認められ、塚原泥流が凹凸する低地に堆積した層と考えられる。因に本遺跡から検出された大半の遺構はこの第一軽石流の層からであった。

(2) 中仲田遺跡Ⅱ

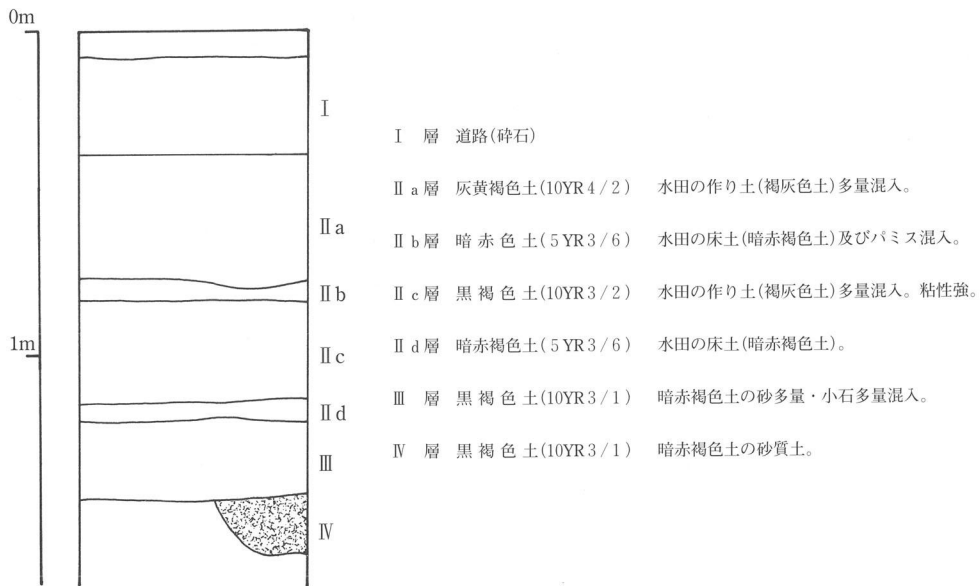
中仲田遺跡Ⅱは、標高703～702 m内外を測り、北から南にゆるやかに傾斜している。本遺跡の基本層序は4層に分れる。第4図に示した図は発掘調査区の北側で観察した層序模式図である。



第3図 辻の前遺跡Ⅱ・基本層序模式図

I・II層は、辻の前遺跡IIと同様な層序が観察され、道路による攪拌土と、近・現代の水田耕作土である。III層は、暗褐色の砂が多量に混入し、小石(1cm大)が多く含まれる層で、過去における河川の氾濫を示す層である。この河川の一つとして、本遺跡の東方約400mの位置に現在濁り川が南流しており、本川の影響であることが十分考えられる。IV層は、黒褐色土層でシルト質の砂が多く混入する層である。

本遺跡における遺構確認面は、第IV層の上部面からで、溝状遺構が三条検出された。



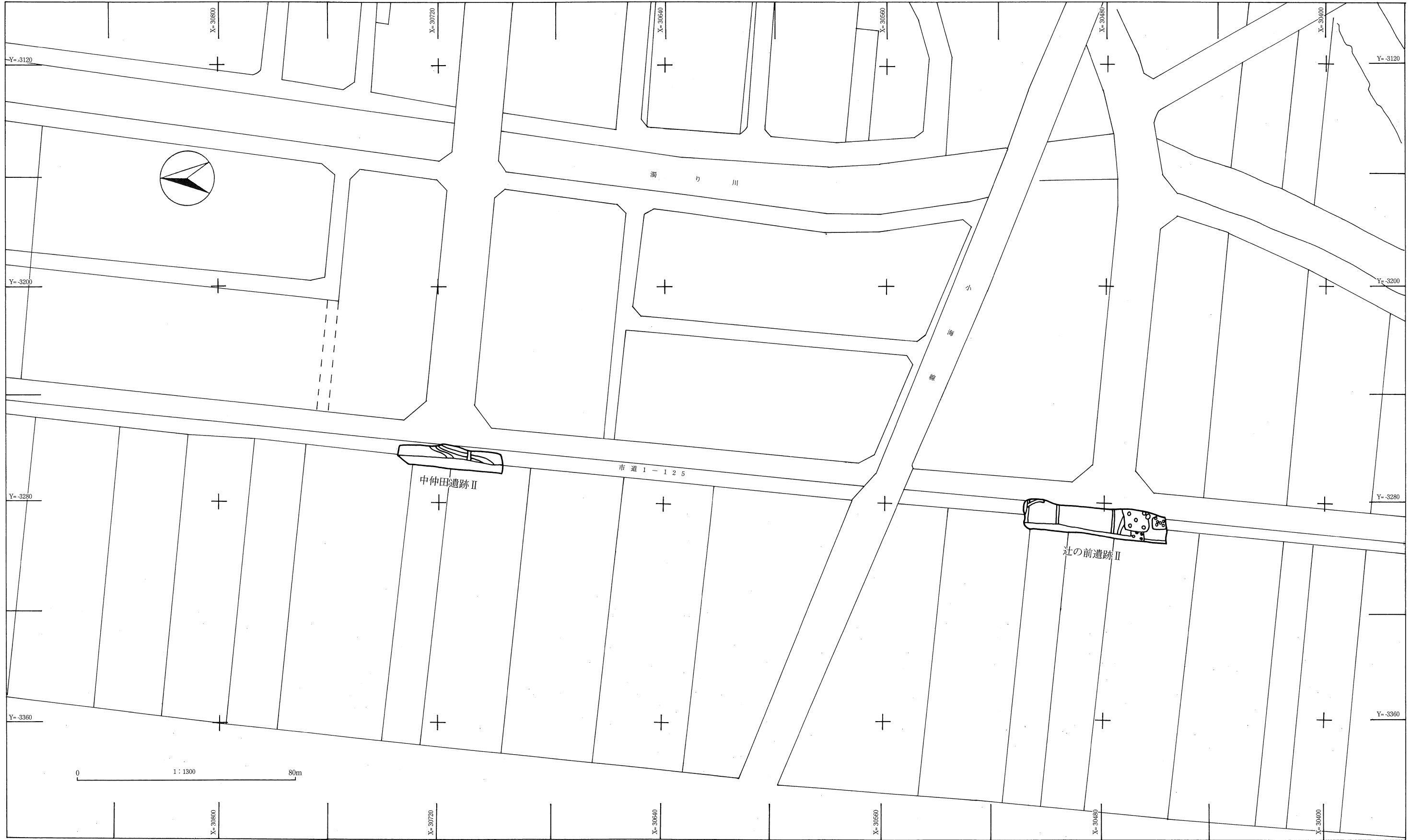
第4図 中仲田遺跡II・基本層序模式図



中仲田遺跡II
層序写真



辻の前遺跡II
層序写真



第5図 辻の前遺跡II・中仲田遺跡II発掘区設定図

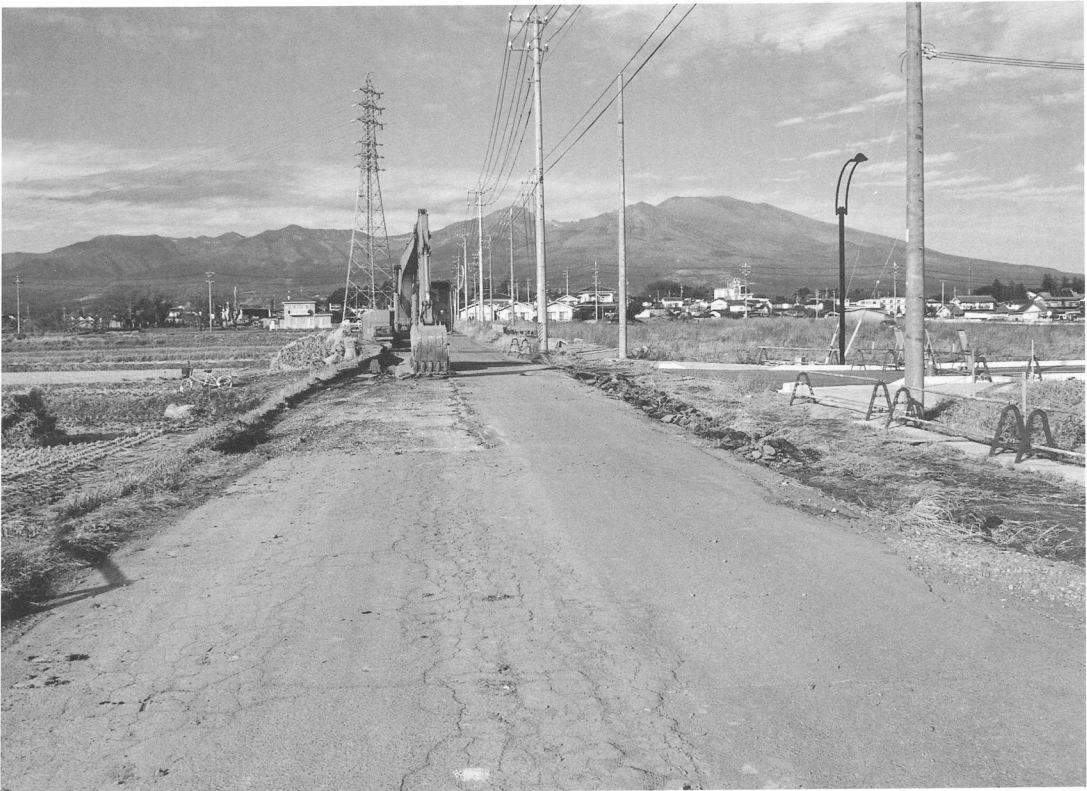
第2節 発掘区と検出遺構

本調査の発掘区については、第2図に示したように辻の前遺跡Ⅱが約500㎡・中仲田遺跡Ⅱが約300㎡と調査面積としては、比較的狭い範囲での発掘区であった。

今回調査が行われた辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱは、佐久市の北部に位置し、新幹線「佐久平駅」の西側約150m地点にあたる。この付近には現在小海線が通過し、また、濁り川が南流している(第2図)。

この地点を地形的にみると、浅間山から南西・西方に向けて「田切り」の地形が放射状に伸びている。しかし、この田切りの地形は、本遺跡に隣接した濁り川流域及び小海線付近でみかけじょう消滅し、当遺跡の周辺から西側には、田切りの谷より押し出された堆積土によって形成された低湿地が広がる。昭和40年代後半までにこの低湿地には火山噴火による泥流により形成された残丘(塚原泥流)が島状に存在したが、今ではかつての面影はとどめていない。現在、当遺跡を含めた濁り川の西岸に広がる水田地帯は一見まさに平坦に見えるが、水田下には著しい凹凸が存在する。これは流山の上部の削平とその周辺低地の埋めたてによるものである。この地形的な特徴は現在では想像もつかないが、岩村田駅から浅間病院・信州短期大学以西の水田下に隠されている。低地には1～2m強の泥炭質土層や洪水砂層が堆積している。

かねてから、今回調査を行った濁り川流域、及び、小海線を挟んだ南西の低湿地には古代の水田に関係する「生産性遺跡」の存在が推測されていた。そして、平成4年度の「濁り遺跡」・平成8年度の「松の木遺



中仲田遺跡Ⅱ 調査区より浅間山を望む

跡」・「中長塚遺跡」などの低湿地に立地する遺跡からは水田に関連する遺構が検出され、生産性をもった遺跡の存在が明らかとなった。

このため、今回発掘調査が行われた地点は、地形的立地が類似するため、古代水田址、若しくはそれに関連する遺構の存在が高められた遺跡であった。だが、第3・4図に示したように、近世・現代の水田址は確認されたものの、当初に注意された遺構などは、本遺跡内から検出されなかった。しかし、辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱが所在する周辺には、水田址が確認された立地と類似する地形が何カ所も見られ、水田址が存在する可能性が非常に高く、すでに圃場整備済みの水田下にも破壊されずに残存している可能性は高い。

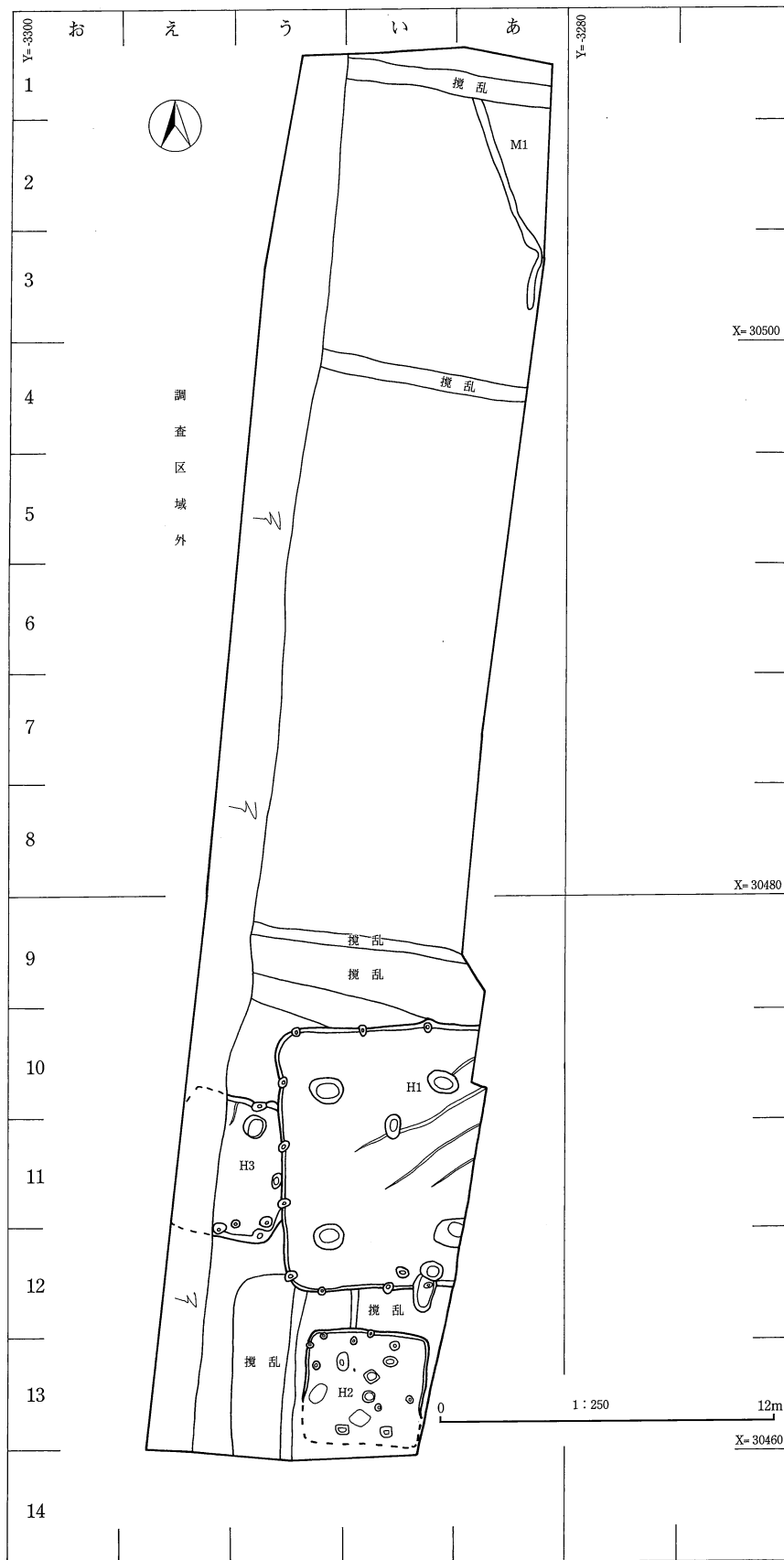
<検出遺構>

辻の前遺跡Ⅱ	竪穴住居址	3軒	弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉
	土坑	1基	古墳時代前期前葉
	溝状遺構	1基	時期不明

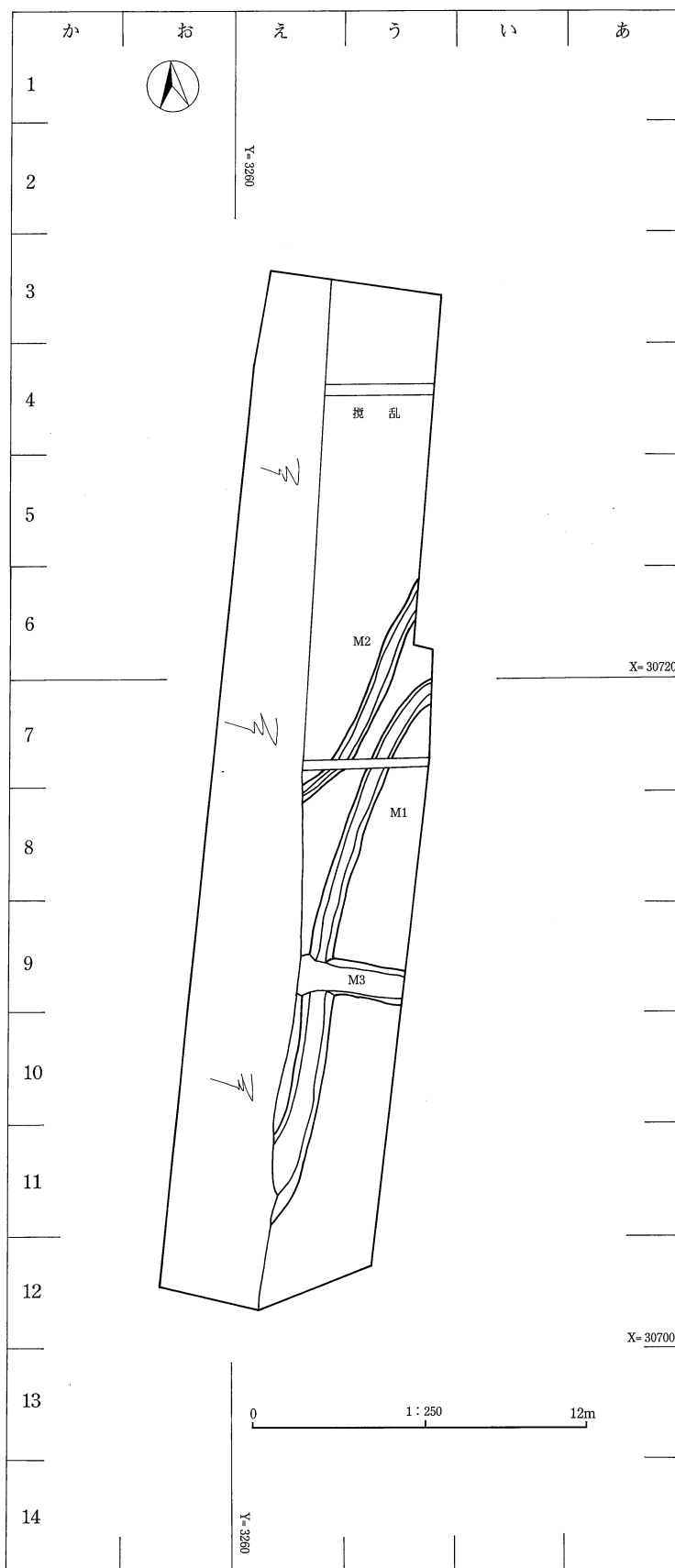
中仲田遺跡Ⅱ	溝址	3基	
	M1号溝址		近世以前(M3号溝址に破壊される)
	M2号溝址		近世以前(M1号溝址と覆土が同様)
	M3号溝址		近世以後



辻の前遺跡Ⅱ H1・H2号住居址付近



第6図 辻の前遺跡Ⅱ全体図



第7図 中仲田遺跡Ⅱ全体図

第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

(1) H1号住居址(8～13図・写真図版三～六・十七～十八)

本住居址は、調査区の南側より検出され、あ・い-10・11グリッドに位置する。遺構確認面は調査区全体の土層観察を行ったA地点(調査区の北側端部)では確認されない第一軽石流の上部面第Ⅳ層から検出された。この第Ⅳ層は調査区の南端部で土層観察を行ったB地点で看取されたように、全体層序の第Ⅴ層を形成する塚原泥流層の低地に第一軽石流層(P1)が堆積したことが考えられる。こうした堆積状況は周辺遺跡の松の木遺跡及び、清水田遺跡からも確認される。

本址は、H3号住居跡と重複関係にあり東壁部及び東北コーナーの一部を破壊している。また、本遺構の東側は調査区外となり、北壁の上部は溝状の攪乱によって破壊され、南壁の、調査区外となる箇所はD1号土坑によって破壊されている。

平面形態及び規模については、残存するプランから推し南北に長軸をもつ方形に近い長方形であることが考えられる。東壁長は890cmを測り、北壁約700cm・南壁約540cmが確認された。確認面からの壁高は南壁及び北壁の東側は70cm内外を測り、西壁高は約30cmと東側に比べ西側が低い残存高を示す。壁溝が検出され壁の直下を一周している。幅約30～20cm、深さは床面から6～14cmで、断面形状は「U字型」を呈する。

床面は堅く平坦である。床面下の掘り方は全体に4～7cmと浅い掘り方で第8図11層のローム粒子が埋められていた。しかし、南壁側は20cm前後の深い掘り込みが認められる。また、本床面の中央部付近では4カ所に、4～7cmの段差が認められる。この4カ所に認められる段差はいずれも東から西へ向かう帯状の段差で、床面中央部付近で消滅する(第8図a・b・c・d)。この段差は地震による地盤変化で生じたことが考えられ、こうした現象は円正坊遺跡・清水田遺跡Ⅱ・直路遺跡Ⅱなどの周辺遺跡においても確認されている。

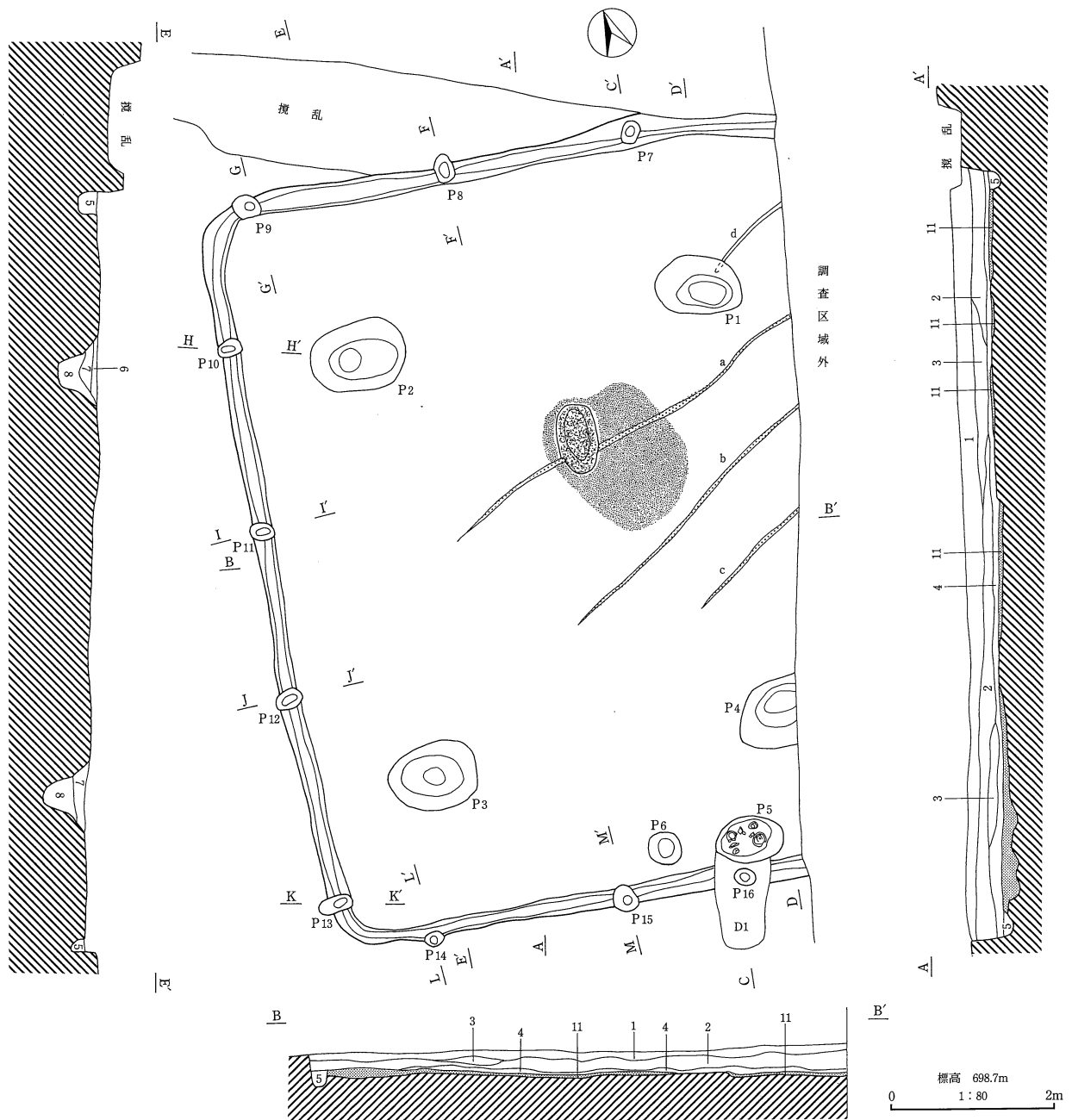
ピットは16個検出され、P1～P4は支柱穴と思われる。径約112cm～120cm内外のピットが、東西の間隔約320cm、南北約440cmの間隔で長方形に配置されている。深さは40～60cmを測り、いずれも楕円形である。

また、南壁の東側に配されるP5は径80cm、深さ28cmの楕円形で、本ピット内からは、二重口縁壺の口縁部破片・軽石の砥石他が出土した。P7～P16は西壁・北壁・南壁の各壁体部から検出されたピットである。このピットの径は、いずれも10～20cmの楕円形で、各壁体部にほぼ200cm間隔で配置されている。計10個が検出されたが、西壁にはP10・P11・P12・P13の4個が配されていることから、調査区外となる各壁体中にも同様な配置がなされていると思われる。

炉は住居址中央のやや北寄りに配されている。径45×80cm、深さ26cmの、楕円形の地床炉である。本炉の北側第3層上部から壺の胴部破片5点が出土した。また、炉の周辺140×180cmの範囲には、炭化材を伴う厚さ4～5cmの灰が多量に混入する層がみられる。

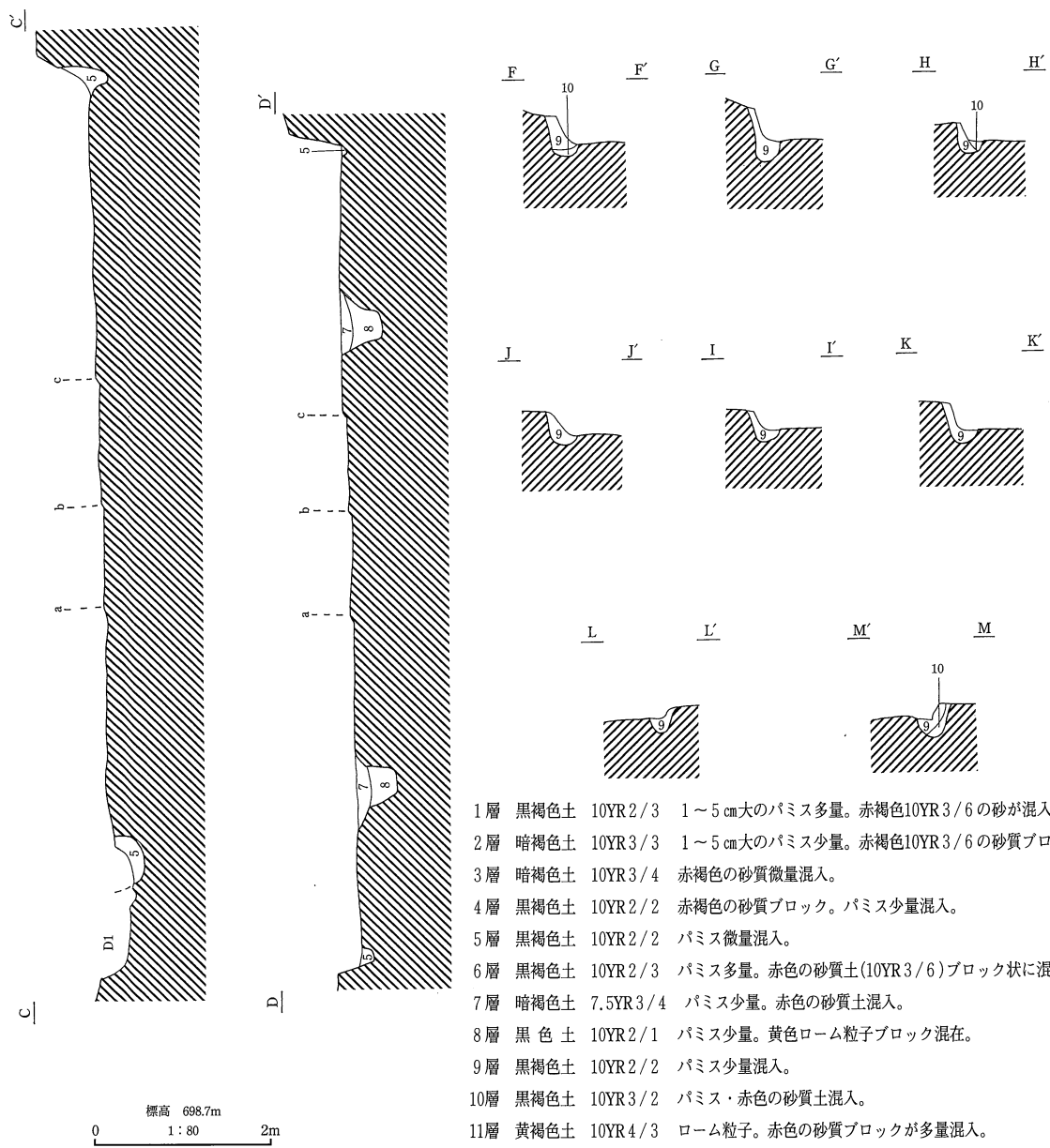
出土遺物は、壺・甕・鉢・高杯・石製品を図示した。図示した遺物の出土位置は11-3・8・10・13がP5内の底面より、7が支柱穴P1内の底面より出土した。各器種ごとにみると、まず壺として4・5・6・10がある。このうち11-10は壺の口縁部破片であり、その形態より所謂「二重口縁壺」の口唇部と考えられ

る。本遺物はこの破片1点のみの出土であり土器全容は不明であるが、口唇部の形態より類似資料と考えられる神奈川県平塚市南原B遺跡出土のものを参考として図上復元し掲載した。施文は口唇部に弱い並行沈線を施した後、径5mmの竹管による円形刺突をほぼ等間隔に施している。口縁部内外面は丁寧なミガキが施され、胎土は非常に精練されている。4は内外面とも丁寧なミガキが施され底部に木葉痕がある。5はミニチュア的土器と考えられる。6は球形胴を持つ壺と考えられ、底部がやや上げ底気味である。次に甕は1・2・3・11・15がある。1は台付甕である。甕としては特異であるが内面口縁部と外面に赤彩が施されている。器高10.5cmの小型品であり、ミニチュア的特殊な意味合いも兼ね備えているとも考えられる。15は折



第8図 H1号住居址実測図

り返しの口縁を持ち、調整等から甕と判断した。7は完形の鉢であるが、内面の調整があらひケズリが残り
 或いは台付甕の脚部からの転用とも考えられる。なお、内面に一部赤彩痕が確認できる。高坏としては8・
 9・14がある。9は高坏坏部であり1/3程が残存している。見込み部はほぼ平坦で体部から大きく膨らみ
 を持って立ち上がる。内外面ともに丁寧な縦方向のミガキが施されている。8は高坏脚部であり、形態は脚部
 が「八」の字状に広がり、脚端部でやや反り返る。4カ所の円形の透かし孔がある。調整は外面がややあら
 いハケメの残るナデで、内面がナデである。14も高坏脚部の破片であり、円形の透かし孔が確認できる。16
 ～34は破片資料として拓本を示した。24・32は櫛描横線文をもつ壺片、16～19・25～28は櫛描波状文をもつ
 甕片、20・21はハケメの甕片である。また22・29は単節縄文を施文した甕片であり、群馬県側の赤井戸式の
 影響が考えられる。石製品としては2点を図示した。12は棒状石製品で石材が緑泥片岩である。出土位置は

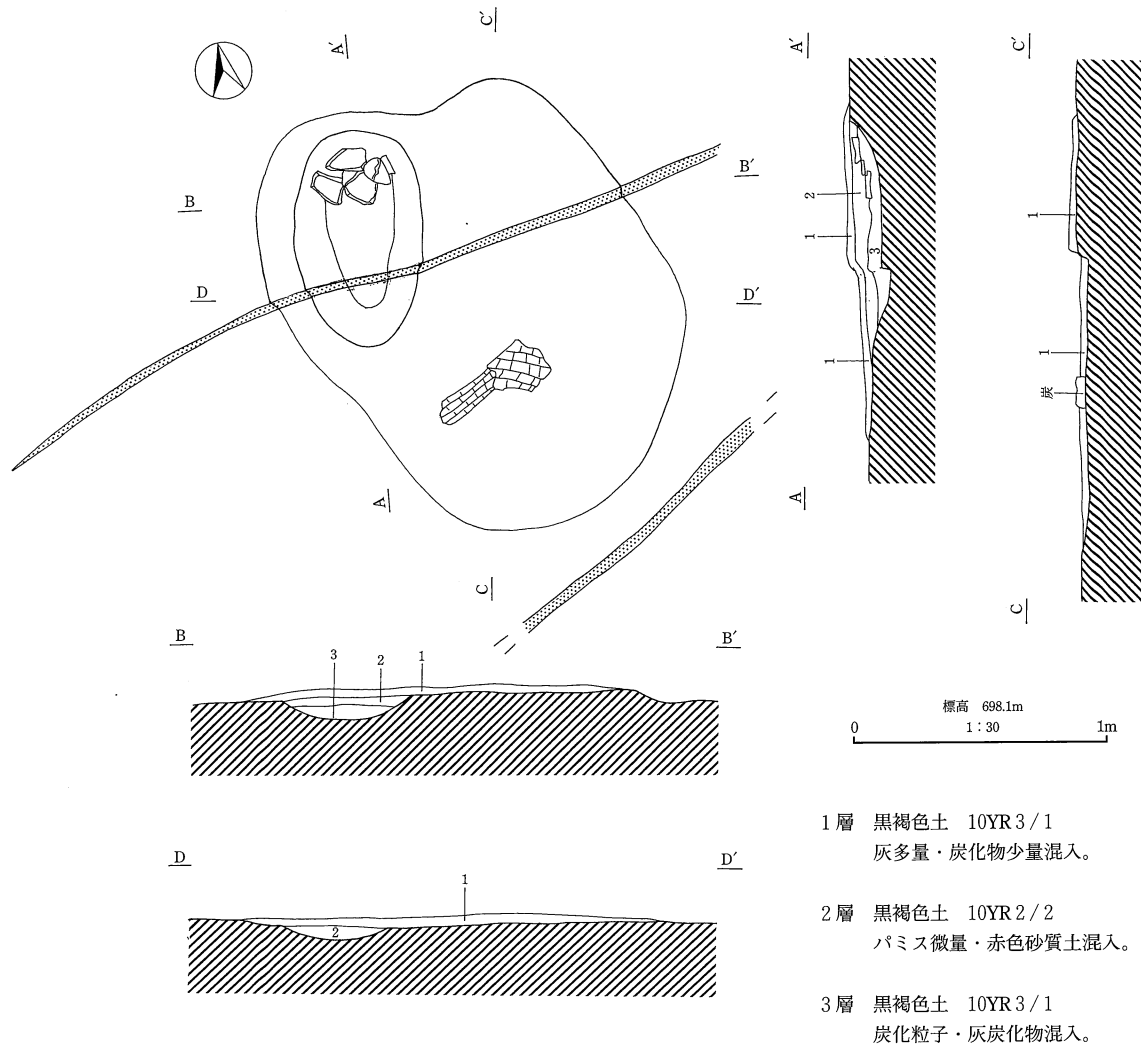


第9図 H1号住居址実測図

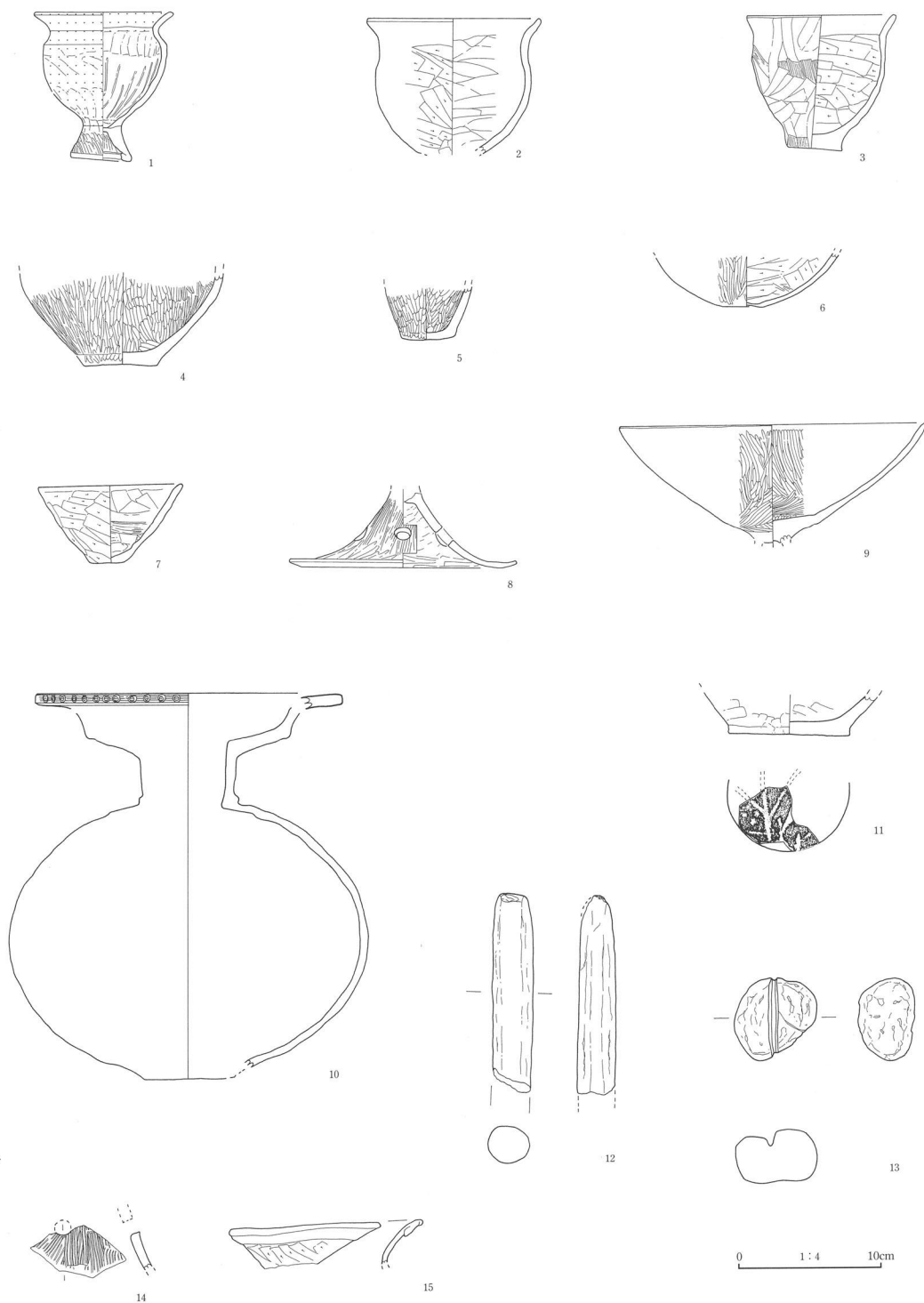
P5の西脇床面より出土した。13は軽石であり、片面に長さ5cm深さ9mmほどの溝状の切り込みがある。

更に、本址からは第12図・13図に示した縄文土器がある。13-35・36・37、13-38・39は楕円押型文及び山形押型文に帯状施文が施された深鉢があり、時期は縄文早期である。40も同時期の山形押型文が施される深鉢である。縄文時代中期初頭の土器は13-41・42があり41は隆帯、42は突起文が施される深鉢である。また、43・44は、縄文時代後期の鉢で、44は沈線で区画される深鉢である。

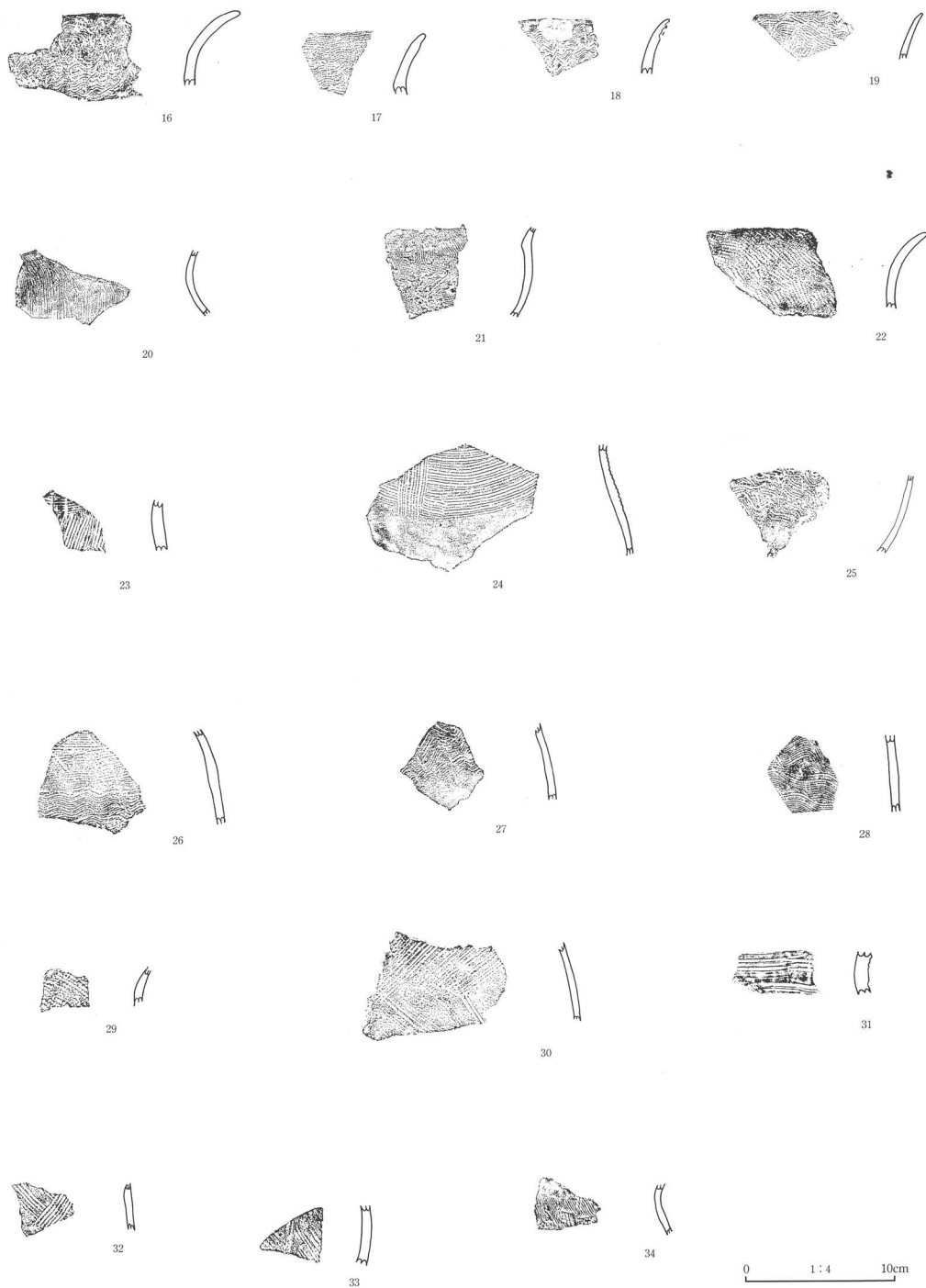
本址の所産時期を出土遺物の土器組成から考えると、まず当地域の弥生時代後期の指標土器である「箱清水式」の壺・甕等を主体的に含まない。小型精製土器は含まれていないが、8・9の高坏や10の壺といった外来系土器が主体を占める。また、住居址の形態が方形基調を採る事などから佐久地域においての古墳時代前期中葉と考えられる。他地域の編年に照らし合わせれば善光寺平南部の青木氏「北平編年」4期後半～5期前半、東海の「廻間編年」ではⅡ期後半～Ⅲ期前半の範疇に当たると考えられる。



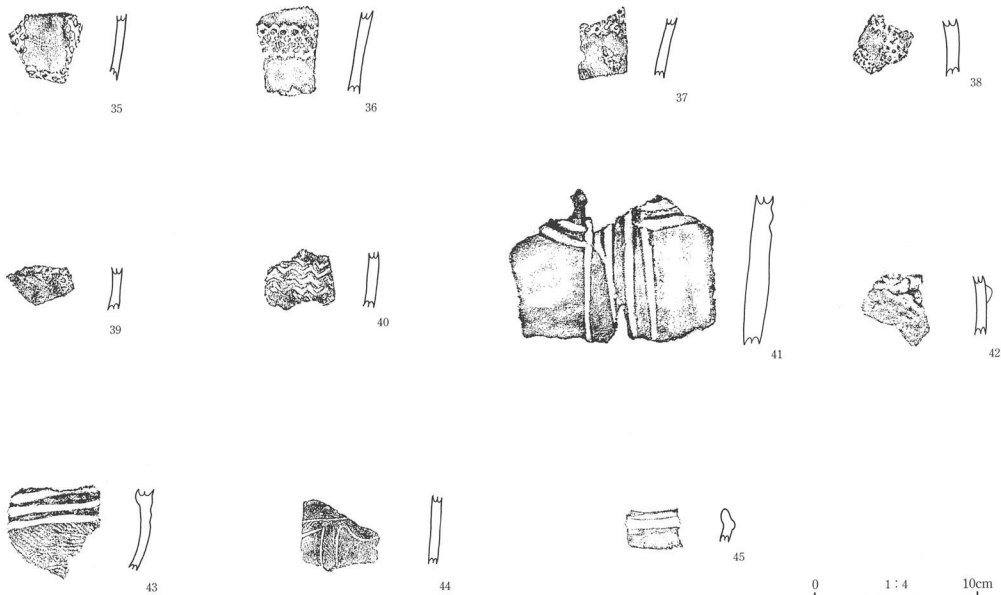
第10図 H1号住居址炉址実測図



第11图 H1号住居址出土遗物实测图



第12图 H1号住居址出土遺物実測図



第13図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H2号住居址(第14~16図・写真図版七~八・十八)

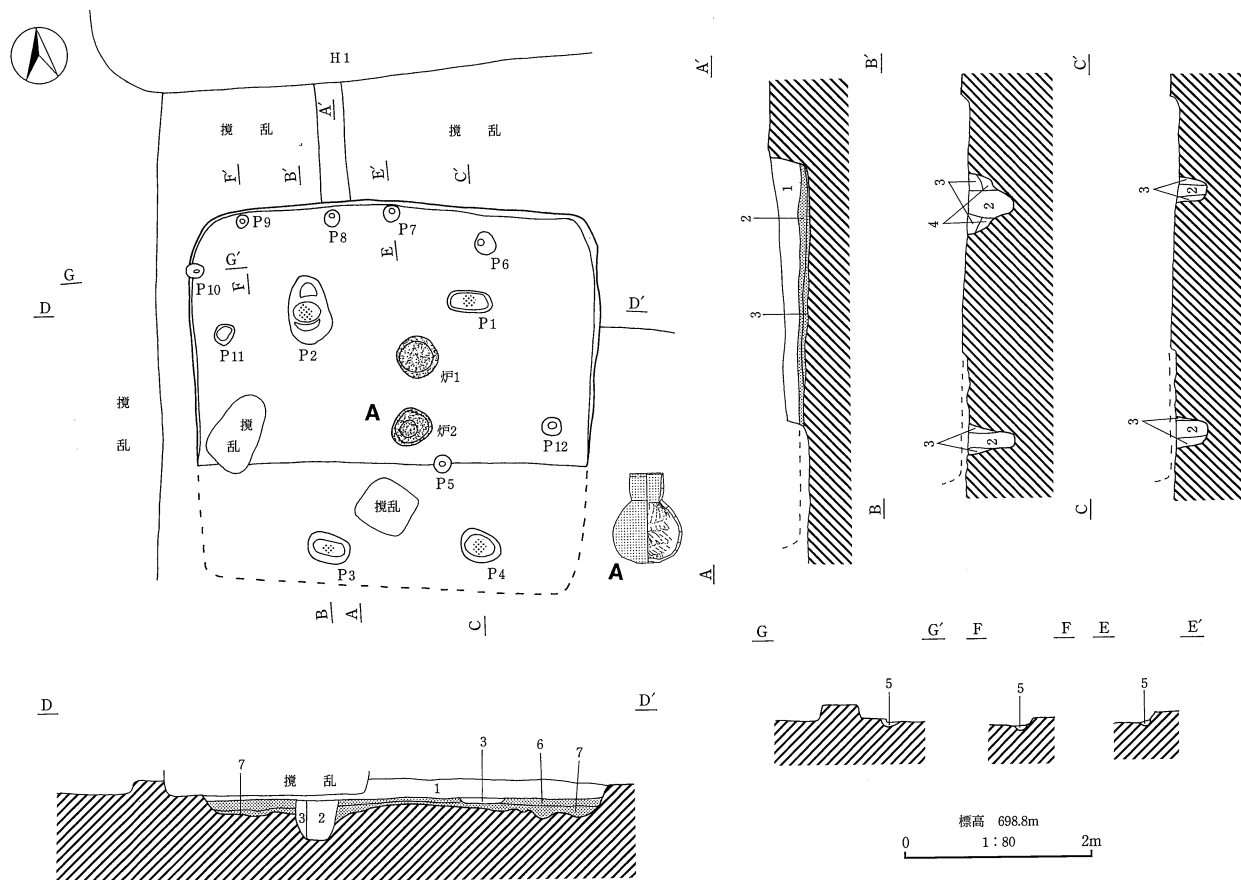
本址は調査区の南側より検出され、い-13グリッドに位置する。遺構確認面は、H1号住居址と同じく全体層序の第V層を形成する塚原泥流層の低地に堆積した第一軽石流(P1)層の第IV層より検出された。

本住居址の大半は、整地によると思われる著しい攪乱を受け遺構の深度はわずかである。しかし、断面図のA-A'及びD-D'の位置には攪乱を受けない幅30cm程の覆土がベルト状(帯状)に残存した。このため当位置において覆土観察を行った。また、住居址中央部の南側は攪乱による破壊を受け旧状は留めていない。しかし、この位置からは、本址の主柱穴であるP3・P4が検出された。

平面形態及び規模については、残存するプランから推し、方形を呈することが考えられる。各壁長は、北壁が400cmを測り、東壁・西壁はいずれも約240cm残存していることが確認できる。確認面からの壁高は、北壁のA-A'の位置で約30cm、東壁のD-D'の位置で20cmを測る。が、他の壁部は総て整地と思われる削平により8cm前後の残存高を測るのみである。

床は全面に貼り床が及んでいて、堅く平坦である。貼り床は全体に4cm程の厚さに施されているが、床面の中央から西側の部分では6~8cmと他部に比べやや厚く施されている。床面下の掘り方は、中央部に比べると東側・西側の壁部周辺は20cm前後と深い掘り込みが認められる。

ピットは12個検出され、P1~P4は主柱穴である。いずれも15cm~20cmの柱痕が確認された。この柱痕間は東西約160cm・南北約240cmを測り長方形に配されている。P2は20×40cmの楕円形を呈し、P1・P3・P4の径も10×20cmの楕円形である。深さはP2が31cmと深く掘り込まれ、他の3個の主柱穴はいずれも20cm前後の深さである。このうちのP10は西壁北側よりの壁体中より検出され、P6~P9は北壁の直下に、P11・P12は西壁・東壁に添って配されている。いずれも径は8cm前後で、深さは4cmと浅い形態のピットであった。この壁面に添ったP6~P12の配置状況から推してこれら小ピットは、破壊され旧状が把握されな



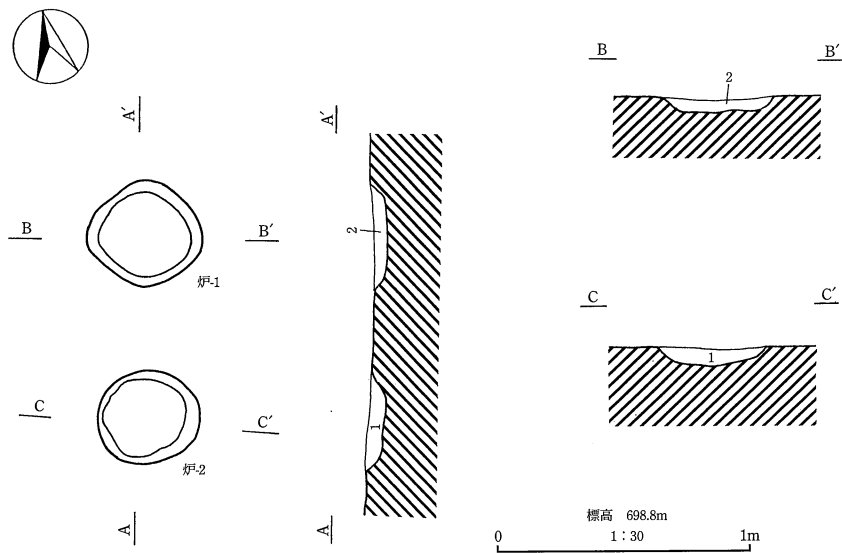
- 1層 黒褐色土 10YR 2/2 パミス少量混入。
- 2層 黒褐色土 10YR 2/3 ローム粒子少量混入。
- 3層 褐色土 10YR 4/4 パミス多量。黄色ローム粒子(10YR 5/6)混入。
- 4層 黒褐色土 10YR 3/1 ローム粒子微量混入。
- 5層 暗褐色土 10YR 3/4 黄色ローム粒子(10YR 5/6)微量混入。
- 6層 暗褐色土 10YR 3/3 パミス少量混入・褐色土(10YR 4/4)が微量混入。
- 7層 黒褐色土 10YR 2/3 ローム粒子・ロームブロック多量混入。

第14図 H2号住居址実測図

い南側壁面部においても配置されていたことが考えられる。

炉は残存するプランから推し、住居址のほぼ中央に2基が配されているものと思われる。炉-1の径は38×40cmで円形を呈し、深さ約5cmの地床炉である。炉-2の径は42×38cmの円形を呈し、深さ約6cmの地床炉である。

出土遺物は第16図に示した壺・甕・高坏が図示された。このうちの16-1は、赤色塗彩が施されている所謂「ひさご壺」で炉2の西脇床面の「A」地点より検出された。器高は19.6cmを測り、胴部の一部が欠損しているが1/2程が残存していた。調整は外面ミガキ、内面ナデである。形態は口縁部が若干内湾気味に立ち上がり、胴部最大径は胴部中程にあるが、腰部の屈曲は意識されている。底部は上げ底気味である。なお、「ひさご壺」の出土は佐久市内では2例目であり、周辺地域の類例としても立科町中原上遺跡出土の2点と



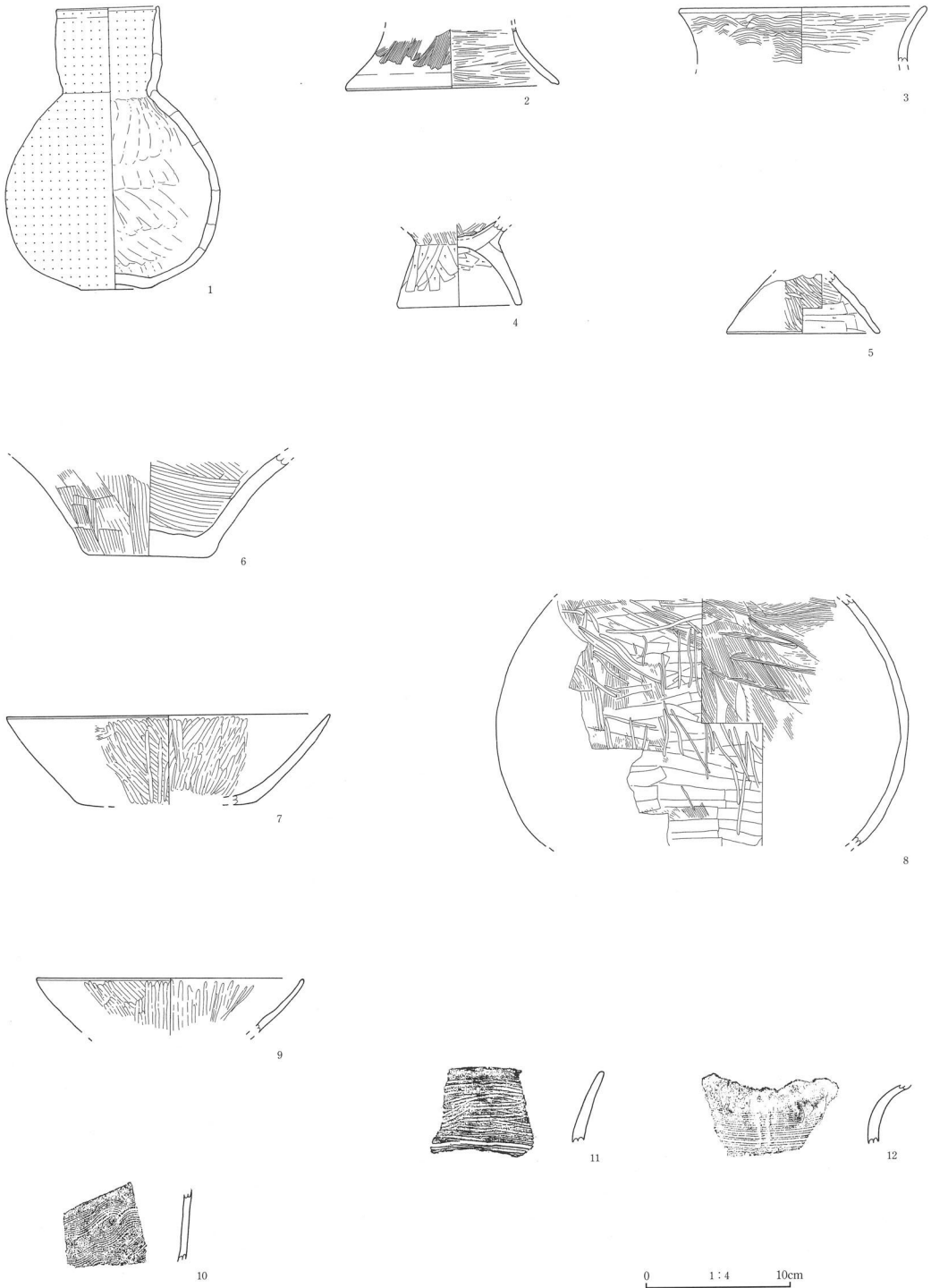
1層 黒色土 10YR2/1 焼土粒子・炭化粒子・灰が混入。

2層 灰黄褐色土 10YR4/2 灰多量。炭化粒子微量混入。

第15図 H2号住居址炉址実測図

やや「ひさご壺」の形態からははずれるかもしれないが類似資料として浅科村中平・田中島遺跡1号方形周溝墓出土の1点のみである。中原上遺跡の資料はいずれも器高15.8と17cmで赤彩はなく、口縁部と頸部に櫛描並行沈線文が施されている。供伴遺物としては赤彩された箱清水式の高坏やハケメ調整の台付甕がある。中平・田中島遺跡の資料は器高18.7cmで、底部を除く外面赤彩で底部はやや上げ底気味となっている。報告書に器種の明記はないが、在来の器種ではなく「模倣品」と位置づけている。他に壺は6・8・11がある。6はハケメを残すナデ調整の胴部下半から底部にかけての部位である。8は球形胴の壺胴部と考えられ、胴部外面にはややあらいミガキ、内面はハケメを残すナデが施されている。11は櫛描簾状文を施した壺頸部破片である。甕は3・4・10・12があり、3と10は櫛描波状文、12はあらい櫛描横線文が施されている。4は台付甕脚部であり、脚部形態は中位から内湾気味に脚端部に至る。高坏は2・5・7・9を図示した。2は内面の調整より高坏脚と考えた。形態は脚端部で大きく広がる形態と考えられる。5は高坏か器台の脚部と考えられ、円形の透かし孔が一カ所確認できる。調整は外面が丁寧なミガキ、内面がハケメの残るナデが施されている。7と9は高坏坏部であり、調整はともに内外面丁寧なミガキが施されている。形態は坏見込み部が平坦となり体部が直線的に大きく開く。なお、5・7・9の3点は胎土に赤色粒子を多量に含む点や調整の共通性から同一個体と考えられる。

本址の所産時期を出土遺物の土器組成から考えると、H1号住居址と同じく、まず当地域の弥生時代後期の指標土器である「箱清水式」の壺・甕等を主体的に含まない。小型精製土器は含まれていないが、1のひさご壺や5・7・9の高坏といった外来系土器が主体を占める。また、住居址の形態が方形基調を採る事などから佐久地域においての古墳時代前期中葉と考えられる。他地域の編年に照らし合わせれば善光寺平南部の青木氏「北平編年」4期後半～5期前半、東海の「廻間編年」ではⅡ期後半～Ⅲ期前半の範疇に当たると考えらる。



第16图 H2号住居址出土遗物实测图

(3) H3住居址(第17~20図・写真図版九~十二・十九~二十一)

本住居址は、調査区の南より検出され、うー11グリッドに位置する。遺構確認面は、H1・H2号住居址と同じく、全体層序のB地点で観察され第一軽石流(P1)層の上部面から確認された。

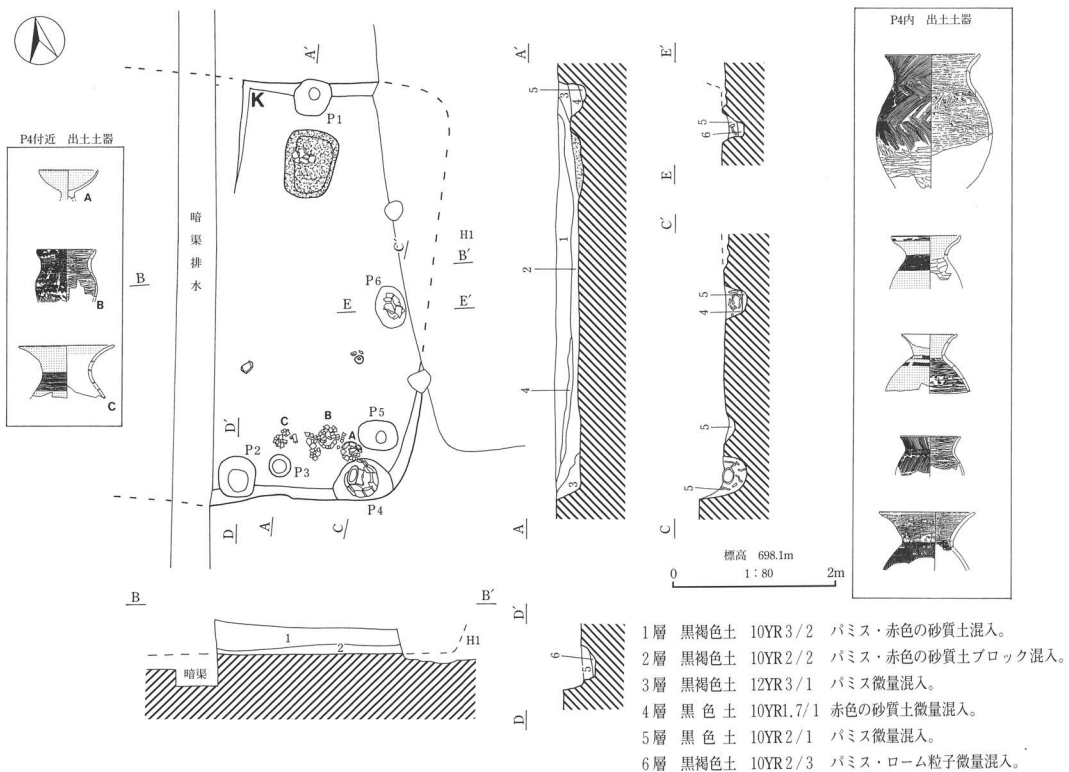
本址は、H1号住居址と重複関係にあり、東壁の大半、また、北東コーナー付近が破壊されている。また、住居址の中央から西側は、水田及び暗渠排水により破壊され、旧状は留めていない。

平面形態及び規模は東壁100cm・南壁200cm・北壁200cmがそれぞれ残存する。

壁高は確認面から、32cm前後を測る。北壁は確認面よりほぼ垂直に床面に達するが、南壁は若干緩やかに傾斜して床面に接する。

床面はほぼ平坦である。貼り床はなくH1・H2号住居址の床面に比べると堅固な状態ではなかった。また、北側床面「K」の位置には、ベッド状に約28cmの段をもつ箇所がある。この段差は北壁部で遺構確認面と同じ高さとなり、一見すると北西のコーナーのように見える。これは、今回調査を行ったH1号住居址の床面4箇所でもみられた地震による地盤変化と同じ現象であることが考えられる。

このベッド状の段差は、Kの位置から直角に南に曲るが、わずか120cmでこの段差は消滅し、床面と一緒になる。そして、残存する東壁のプランを結んで、Kのコーナーからの北壁長を測るとわずか200cm程しかの北壁になりかねない。一方、この北壁に対応する南壁の残存状況は、まず、Kのコーナー方向へ向かうための南西コーナーは確認できず、攪乱されている西側へさらに伸びる様相を呈している。従って北壁の200cm



第17図 H3号住居址実測図

と推測される壁長に対して、南壁の長さは400~500cmが推測されまったく違う壁長となってしまう異様な形態をもつ住居址となってしまう。こうした地震によると思われる現象は当遺跡の周辺でも確認され、例えば円正坊遺跡・清水田遺跡Ⅱ・直路遺跡Ⅱなどの遺跡においても把握されている。

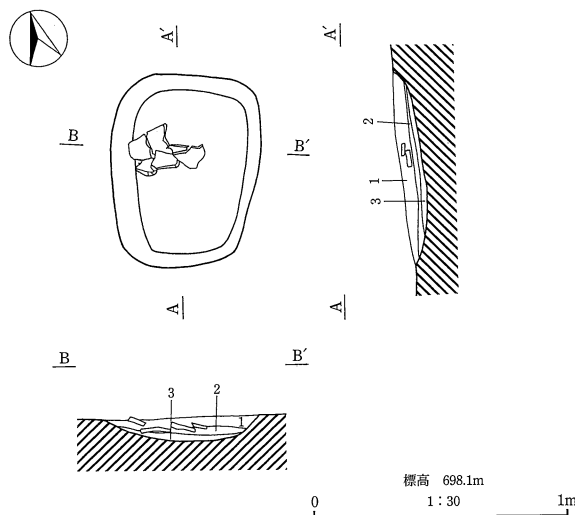
ピットは6個検出されたが支柱穴と思われるピットは確認されなかった。P1・P2・P4は壁体部に配されたピットで、P3・P5・P6は各壁に添って検出された。まず、P1は北壁の壁体部からで、P2は南壁体部より検出された。規模は径40cm前後で深さは床面から10cm~20cmを測りほぼ円形を呈している。P4は南東のコーナーから検出され、当コーナーの壁面をほぼ垂直に掘り込む形態のピットである。径70cm・深さ約40cmを測る。P3は南壁直下の床面、P5・P6は東壁に添った床面より確認された。ピットの規模はいずれも40cm前後で深さは約30cmである。

炉は北壁のP1近くに配されている。径約60×80cm、深さ12cmの長方形を呈する地床炉である。覆土1層上部より甕の胴部片(第19図3)が出土している。

出土遺物は、甕・壺・片口浅鉢・高杯・扁平片刃石斧・磨石などが図示された。他には20-16に示した縄文土器がある。この中で甕19-4・20-5、壺20-6・7・9はいずれもP4内から出土した。他に本ピット内からは20-17の磨石がある。また、本P4内の底部面から出土した壺20-6の口縁部内面には木材状の物質が付着していた。このためこの木林状の物質について分析・鑑定を専門機関に依頼した。その結果、本物質は骨であることが明らかとなった。しかし、この骨の種別については明確な鑑定を下すまでには至らなかった(付図)。19-1はP6から出土した甕で、3は炉から出土した甕である。また、P6脇の床面からは20-11の片口の浅鉢が、P3・P4間の床面からは20-12の高杯・19-2の甕・20-8の壺が出土した。他に床面から20-18の扁平片刃石斧が出土し、混入遺物として20-16の縄文後期の列点文・縄文・沈線が施される深鉢がある。

壺は6~9がある。赤彩は9を除いた3点が施されている。6は口縁部から胴部上半が残存している。形態は口唇部が受け口状を呈する。施文は口唇部に

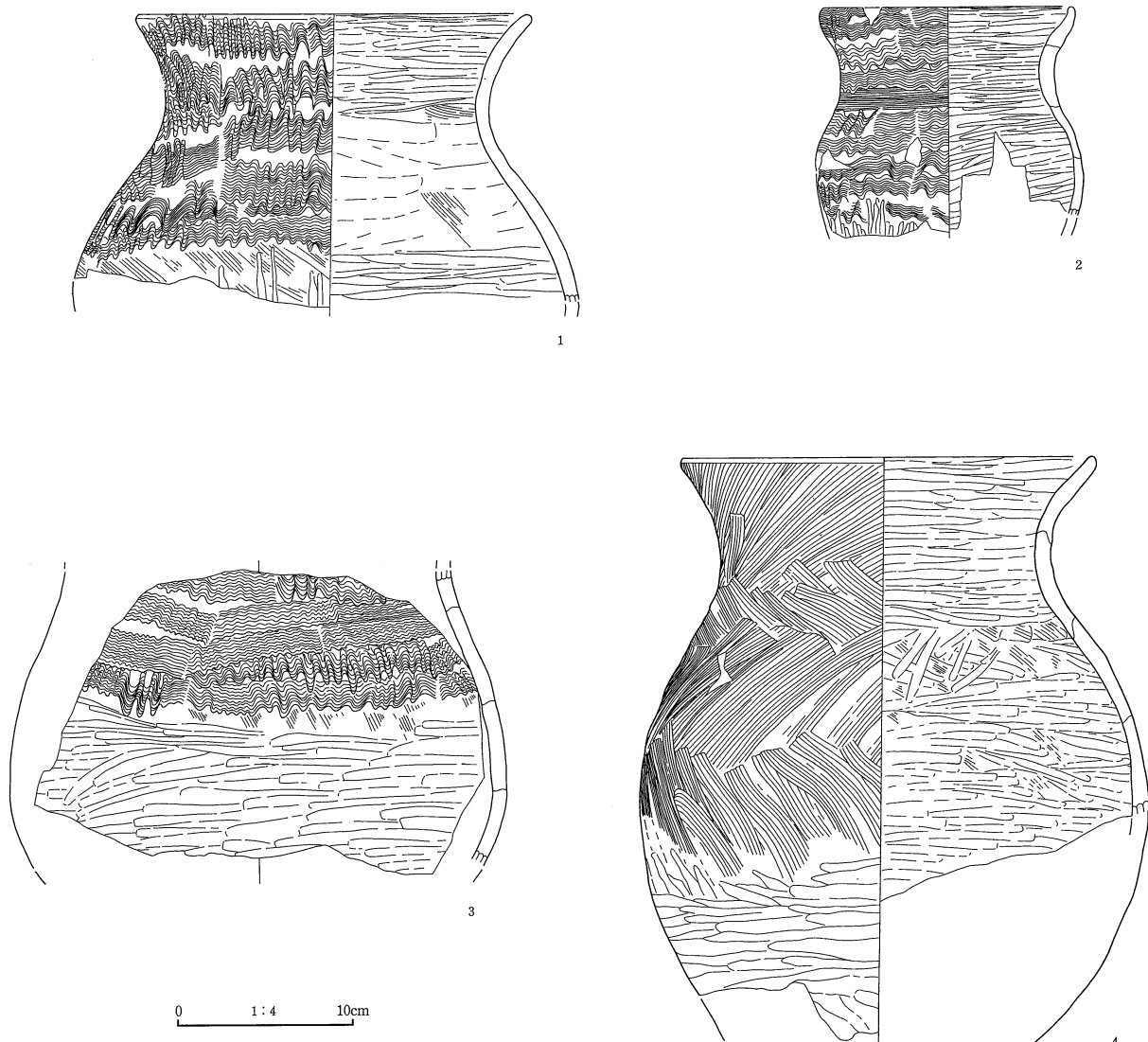
櫛描波状文、頸部は上段が13本1単位の櫛描簾状文(3連止め)、下段が13本1単位の櫛描横走平行線文が施されている。7は口縁部から胴部上半が残存している。胴部の欠損状況が直線状となるため器台等への転用が考えられる。形態は頸部より「く」の字に口縁部が屈曲し直線的に広がる。施文は頸部に上段が10本1単位の櫛描簾状文(3連止め)と間隔をおいて下段に10本1単位の櫛描横走平行線文が施されている。8は口縁部から頸部が残存している。施文は頸部に9本1単位の櫛描横走平行線文が3段施されている。9も口縁部から頸部の残存で、施文は頸部に11本1単位の櫛描簾状文(3連止め)を施した後、単節縄文を少なくとも3段施している。なお、15は同一個体と考えられる。本土器は施文文様に群馬県側の弥生



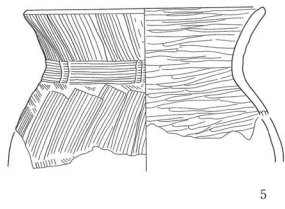
- 1層 黒褐色土 10YR 2/3 パミス・赤色(10YR 2/2)の砂質土少量混入し、炭化粒子混在。
- 2層 黒色土 10YR 1.7/1 灰・炭化粒子混入。
- 3層 黒褐色土 10YR 2/3 灰・炭化粒子混入し、少量の焼土粒子混在。

第18図 H3号住居址炉址実測図

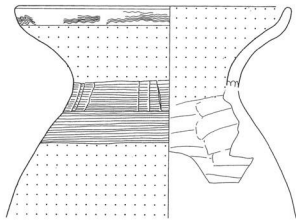
後期土器の影響を受けていると考えられる。甕は1～5・11がある。1は口縁部から胴部上半が残存している。施文は口縁部から胴部上半に14本1単位?の櫛描波状文を施す。2も口縁部から胴部上半が残存している。施文は頸部に13本1単位の櫛描横走平行線文を施した後、口縁部と胴部上半に13本1単位の細かな櫛描波状文を施す。3は胴部上半のみ残存し、施文は胴部上半にやや不規則な櫛描波状文を施す。4は口縁部から胴部下半まで残存する。施文は口縁部から胴部中位まで9本1単位?による櫛描斜走直線文が横位羽状に施されている。5は口縁部から胴部上半が残存する。施文は口縁部と胴部上半に櫛描斜走直線文を施し、その後頸部に9本1単位の櫛描簾状文(2連止め)を施している。11は甕の胴部下半から底部であり、胎土や内面の状態から5と同一個体の可能性がある。10は小型の片口鉢であり口縁部を一部欠損するがほぼ完形に近い。形態は口縁部下に僅かに屈曲する稜を持ち、口唇部で内湾する。内外面ともに丁寧なミガキが施され、赤彩されている。12は高坏で脚部を欠損する。坏部形態は脚接合部から膨らみを持ちつつ立ち上がり口唇部で直線的に立ち上がる。調整は内外面ともに丁寧なミガキが施され赤彩されている。13は高坏坏部か鉢口縁



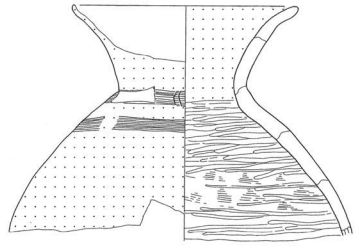
第19図 H3号住居址出土遺物実測図



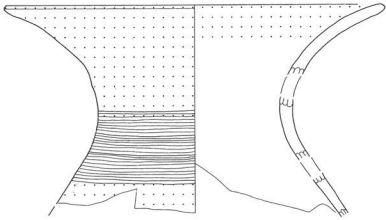
5



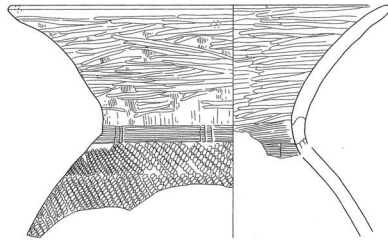
6



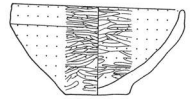
7



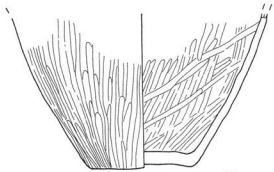
8



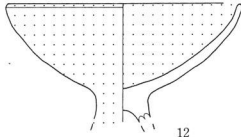
9



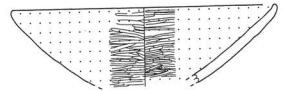
10



11



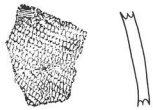
12



13



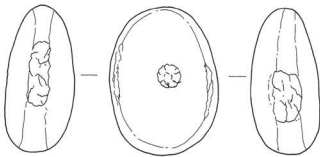
14



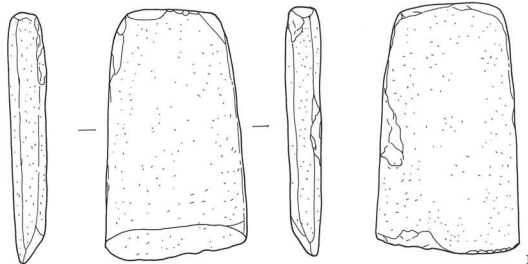
15



16



17



18

0 5-17 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第20图 H3号住居址出土遺物実測図

部の破片と考えられる、内外面ともに丁寧なミガキと赤彩が施されている。14は単節縄文が施文された土器片で器種等の特定は困難であるが9と同様に群馬県側の影響を受けていると考えられる。

本址の所産時期を土器組成から考えると、まず当地域の弥生時代後期の指標土器である「箱清水式」の壺・甕等が主体である。ただ、大型の高坏がなく、7のように形態的に箱清水本来の器形が変容したものも存在する事などから佐久地域における弥生時代後期後半(小山氏編年後期Ⅳ～Ⅴ期)と考えられる。

引用・参考文献

- 青木一男 1996 『大星山古墳群・北平1号墳』—長野市内その5—上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7
 赤塚次郎 1994 「3・4世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』 山川出版社
 小山岳夫 1999 「佐久地方の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』 長野県考古学会弥生部会

第2節 土 坑

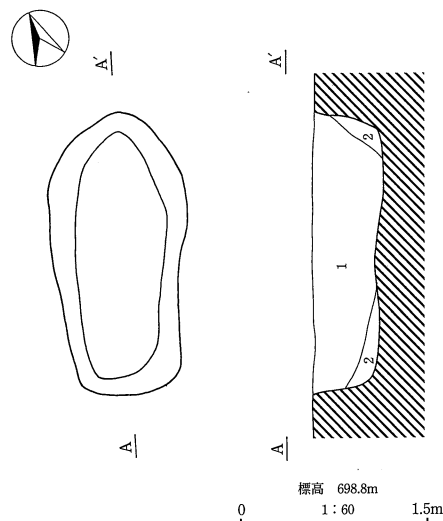
(1) D1号土坑(第21図・図版十二)

本土坑は、調査区の南側より検出され、い-12に位置する。遺構確認面は、B地点で観察した全体層序の第Ⅳ層を形成する第一軽石流(P1)層の上部面から確認された。

本址はH1号住居址と重複関係にあり、住居址の南壁中央部と思われる個所を破壊し、また、P5・P16の上部を壊している。

平面形態及び規模は、東西105cm・225cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。断面形状は南壁・北壁ともに底部面よりほぼ垂直に立ち上がる。底部面はほぼ平坦を呈するものの中央部は「波状」に高く盛り上げられている。覆土は2層に分割される。本土坑に堆積する覆土の大半は、第1層の黒褐色土で赤色の砂質土が混入している。2層は壁の直下に堆積する暗褐色土の層である。本址の覆土堆積状況はプライマリーである。

尚、本土坑から遺物は確認されなかった。



1層 黒褐色土 10YR 2/2 パミス多量混入し、赤色の砂質土が混入。

2層 黒褐色土 10YR 3/3 パミス少量・黄色ローム粒子少量混入。

第21図 D1号土坑実測図

第3節 溝 址

(1) M1号溝址(第22図・写真図版第十三)

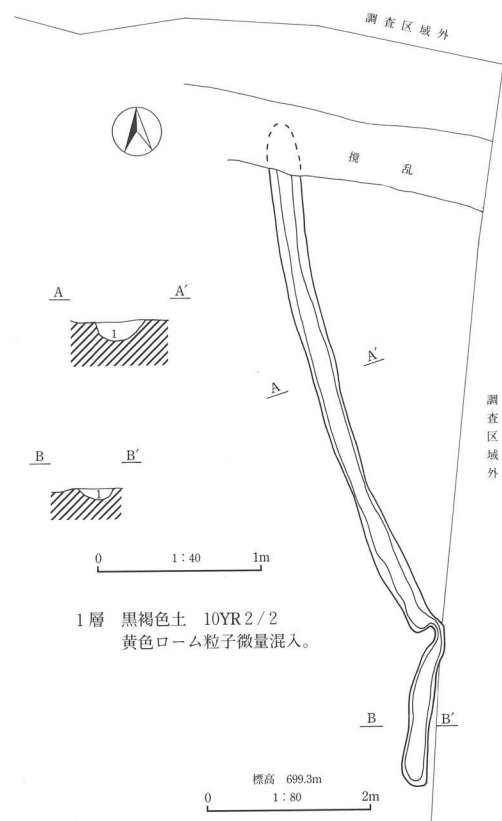
本溝址は、調査区の北、調査区域外となる、あ・い-1・2・3グリッドより検出された。

遺構確認面は、調査区全体の土層観察を行ったA地点(調査区の北側端部)の全体層序第V層(塚原泥流層の上部)から検出された。

本址の北側は水路による配管によって破壊されているが、この水路より北側においては確認されなかった。よって、本址の北は破壊を受けた当位置付近で立上ることが考えられる。また本址の南側は東側調査区外となるあ-3グリッド付近で「くの字」状に曲って約200cm程で消滅する。

残存する規模は全長で約800cm確認された。幅は20~30cmで、深さは12~20cmを測り北側に比べ南側が浅い。断面の形状は「U」字形で、底部からゆるやかに確認面まで立ち上がることが認められた。

本址からの出土遺物はなく時期決定はなされない。



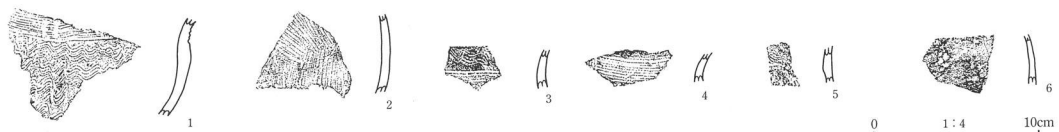
第22図 M1号溝址実測図

第4節 表採遺物(第23図・写真図版二十)

表採遺物には、第23図1~5に示した甕の小破片、6の縄文土器がある。

1は甕の頸部片で、7本単位で構成される波状文・櫛描連状文二連止が施され、この甕胴部片はハケ状工具による斜走直線文が横位羽状に施される。また、3は櫛描連状文・波状文、4は櫛描垂下文・櫛描横走文、5は波状文がそれぞれ施される甕の胴部片である。

6は楕円押型文・山型押型文が施される縄文早期の深鉢である。



第23図 表採遺物実測図

第V章 中仲田遺跡Ⅱの遺構と遺物

第1節 溝 址

(1) M1号溝址(第24図・写真図版十四～十六)

本溝址は、調査区のほぼ中央付近から検出された。

遺構確認面は、調査区北側で土層観察を行った全体層序の第Ⅳ層(第4図)から検出された。本層は黒褐色土の層でシルト質の砂が多く混入する層である。

確認された溝の長さは約12mで、北東側は調査区域外となり、南西側は道路の壁面及び水田により破壊されている。幅80cm内外、深さ30cmを測り底部は平坦である。底部からの立ち上りは緩やかに確認面へ達する。

出土した遺物がなく時期は不明である。しかし、本址は近世と思われるM3号溝址に破壊されていることから近世以前としかいえない。

(2) M2号溝址(第25図・写真図版十五・十六)

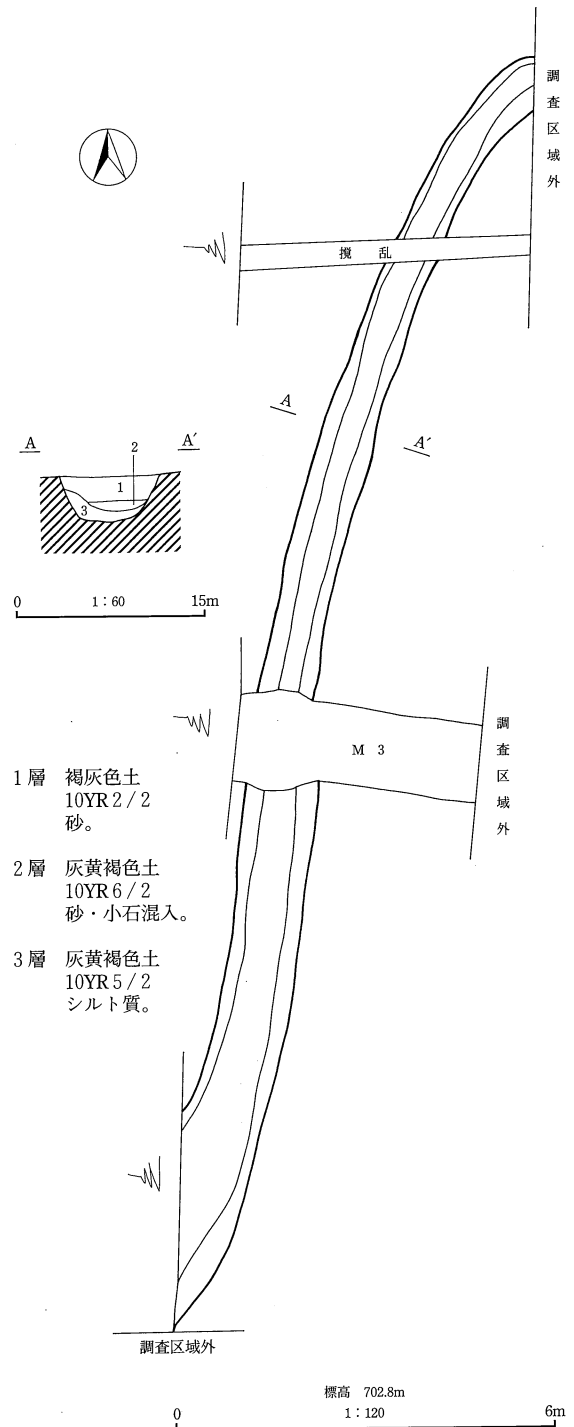
本溝址は、調査区のほぼ中央付近から検出された。

本址は、M1号に隣接しており、M1号址に添う形で検出された。遺構確認面は全体層序の第Ⅳ層(第4図)からである。確認された溝の長さは約8mで、北東側は調査区外となり、南西側は道路の壁面及び水田によって破壊されている。幅は約60cmで、深さは30cm内外である。底部はほぼ平坦で、緩やかに確認面へ達する。出土遺物がなく時期は不明である。

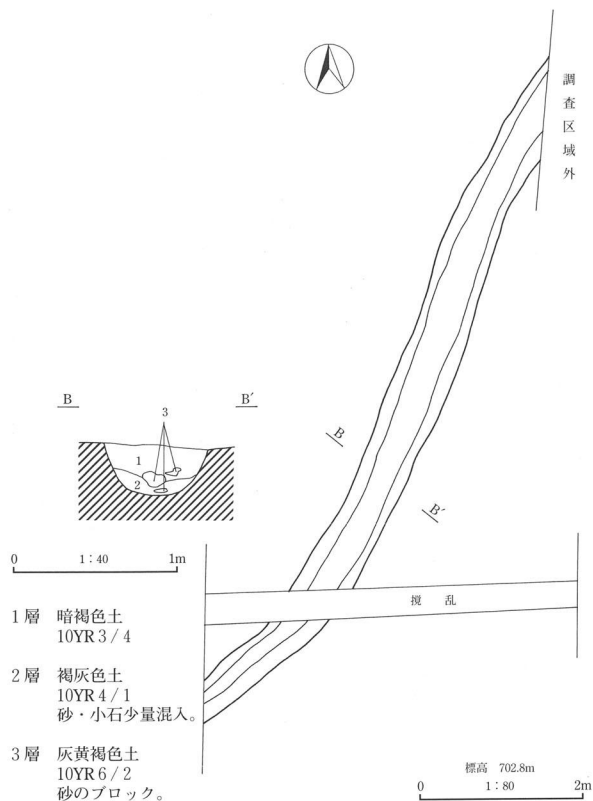
(3) M3号溝址(第26図)

本址は調査区のほぼ中央から検出された。

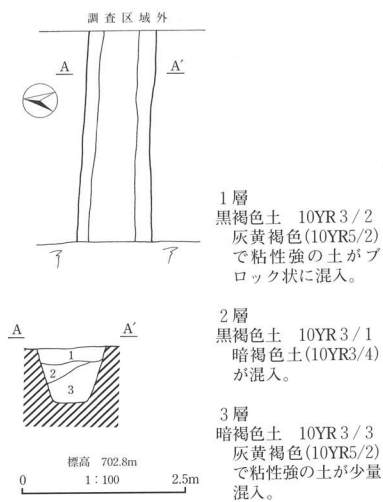
遺構確認面は、全体層序の第Ⅳ層からである。本址はM1号溝址を破壊し、東側は調査区外となる。西側は道路の壁面及び水田によって破壊されている。確認された遺構の長さは、3.7cmで、幅約1m、深さ約90cm内外である。本址の時期は出土遺物がなく不明である。しかし、埋土中に近世水田址の作り土にみられた粘性強の灰黄色土がブロックに混じることから近世か。



第24図 M1号溝址実測図



第25図 M2号溝址実測図



第26図 M3号溝址実測図

第2節 表採遺物

表採遺物は第27図に示した須恵器の破片、及び、甕の小破片がある。

1は須恵器の甕胴部で、2は櫛描斜走直線文が施される甕の胴部破片、3・4は波状文であるが小破片で施される単位構成は把握できない。5は波状文に櫛描連状文が施される甕の頸部破片である。

1～5は小破片のため明確な時代決定がなされない。



第27図 表採遺物実測図

付 編

辻の前Ⅱ遺跡出土弥生時代土器の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

辻の前Ⅱ遺跡の弥生時代後期後半の竪穴住居址 H3 南東隅付近からは、P4 が検出されている。P4 内には、弥生土器が伏せられた状態で出土し、土器には木材状の物質が付着していた。木材状の物質は木材、あるいは骨の可能性が考えられた。

今回の分析調査では、土器底部および土器付着の土壌試料と、対照試料として採取された H3 覆土についてリン・カルシウム分析を行い、土器に付着していた木材状の物質について観察を行い、その由来を明らかにする。なお、当初はリン・炭素分析を計画したが、木材状の物質について、骨の可能性も考えられたため、骨が残存している場合に高い値を示すリン・カルシウム分析を行うこととした。

1. 試料

(1)木材状物質

試料は、H3 P4 から出土した土器に付着していた木材状の物質 1 点である。土壌とともに採取して試料とした。

(2)土壌試料

試料は、土坑底部の土壌(H3 D1 底部)、土器付着土壌(H3 P4 土器付着土壌)の 2 点と、対照試料として採取された H3 の覆土(Na3)の合計 3 点である。このうち、土器付着土壌中には、木材状物質の破片が混じっている。

2. 方法

(1)木材状物質の同定

土壌中から木材状物質を拾い出して、常温で自然乾燥させる。試料の横断面について、実体顕微鏡を用いて観察し、組織の特徴から種類を判別する。

(2)土壌試料のリン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分析ーバナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分析ー原子吸光光度法でそれぞれ行った(土壌養分測定法委員会、1981)。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して 2.00mm の篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5 時間)により測定する。風乾細土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約 5 ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約 10 ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100 ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅ mg/g)とカルシウム含量(CaO mg/g)を求める。

3. 結果

(1)木材状物質

試料は、黄白色～黄褐色を呈し、内部は空洞となる。繊維状の組織が認められるが、植物の繊維細胞とは異なる。また木本類に見られる道管・仮道管・放射組織などの組織や、タケ亜科などに見られる不斉中心柱のような組織は認められない。繊維状の組織は、骨に見られる緻密骨の構造(鈴木、1998)によく似ている。また、繊維状組織の内側には、海面骨に似た組織も一部見られる。

以上の結果から、木材状の物質は骨と考えられる。

(2)リン・カルシウム分析

分析結果を表 1 に示す。対象とした試料はいずれも砂画分が多く、土性は SL(壤質砂土)～LS(砂壤土)に区分される。そのため、潜在的な成分保持力が低いことが予想される。

分析結果では、リン酸含量は対照試料である H3 覆土 Na3 において、0.87P₂O₅ mg/g、H3 D1 底部で 1.02P₂O₅ mg

/gと低い。一方、H3P4土器付着土壌では、12.48P₂O₅mg/gと他の試料と比較して著しく高い値が得られた。また、カルシウム含量については、H3覆土№3とH3D1底部では、それぞれ6.23、6.87CaOmg/gであった。しかし、H3P4土器付着土壌では、13.21CaOmg/gと他の試料よりも高い傾向にあることが認められた。

4. 考察

土器が出土したP4のリン・カルシウム分析結果で、土器付着土壌で、リン酸、カルシウムがともに高い傾向にある。とくに、リン酸含量、天然賦存量の

調査例(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)と比較しても高い値である。この結果から、土器付着土壌では、リン酸およびカルシウムの富化が指摘できる。そして、土器付着土壌中から骨片と考えられる物質が検出されていることを考慮すれば、リン酸とカルシウムの富化は、同定されない骨に由来すると考えられる。

P4底部土壌のリン酸およびカルシウム含量は、対照試料と同様の値となっており、土器付着土壌に見られたような富化は認められない。その土性から、リン酸やカルシウムの吸着固定能は低いと予想される。そのため、骨として残存した以外のリン酸、カルシウムの大部分は、降雨時の水の移動等によってP4外に流亡した可能性がある。

表1 リン・カルシウム分析結果

試料名	土性	土色		P205(mg/g)	CaO(mg/g)	備考
H3 土器付着土壌	SL	2.5Y3/1	黒褐	12.48	13.21	
H3 D1底部	LS	2.5Y4/3	オリーブ褐	1.02	6.87	
H3 №3	SL	2.5Y3/2	黒褐	0.87	6.23	対照試料

(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2)土性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。

SL……砂壤土(粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

LS……壤質砂土(粘土0~15%、シルト0~15%、砂85~95%)

引用文献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.28-36.

Bowen,H.J.M.(1983)環境無機化学—元素の循環と生化学—.浅見輝男・茅野充男訳、297p.、博友社[Bowen,H.J.M.(1979)Environmental Chemistry of Elements].

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980)土壌の化学。岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳、309p.、学会出版センター[Bolt,G.H.and Bruggenwert,M.G.M(1976)SOLT CHEMISTRY].

土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法。440p.、養賢堂。

川崎弘・吉田滯・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、149p.:p.23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖。

ペドロジスト懇談会編(1984)土壌調査ハンドブック。156p.、博友社。

鈴木隆雄(1998)人骨に関する基礎知識。馬場悠男編「考古学と人類学」、p69-82,同成社。

图 版





辻の前遺跡Ⅱ近景



辻の前遺跡Ⅱ全体層序



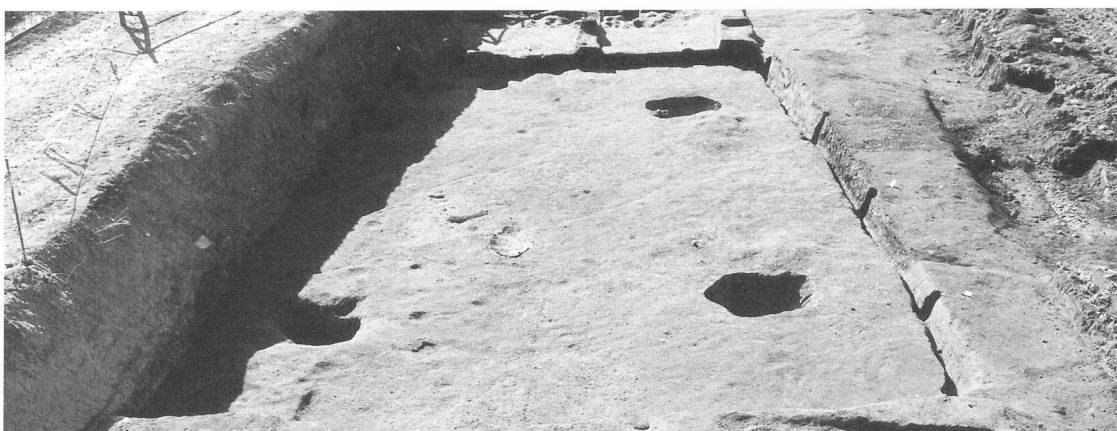
H1号住居址(南方より)



H1号住居址(北方より)



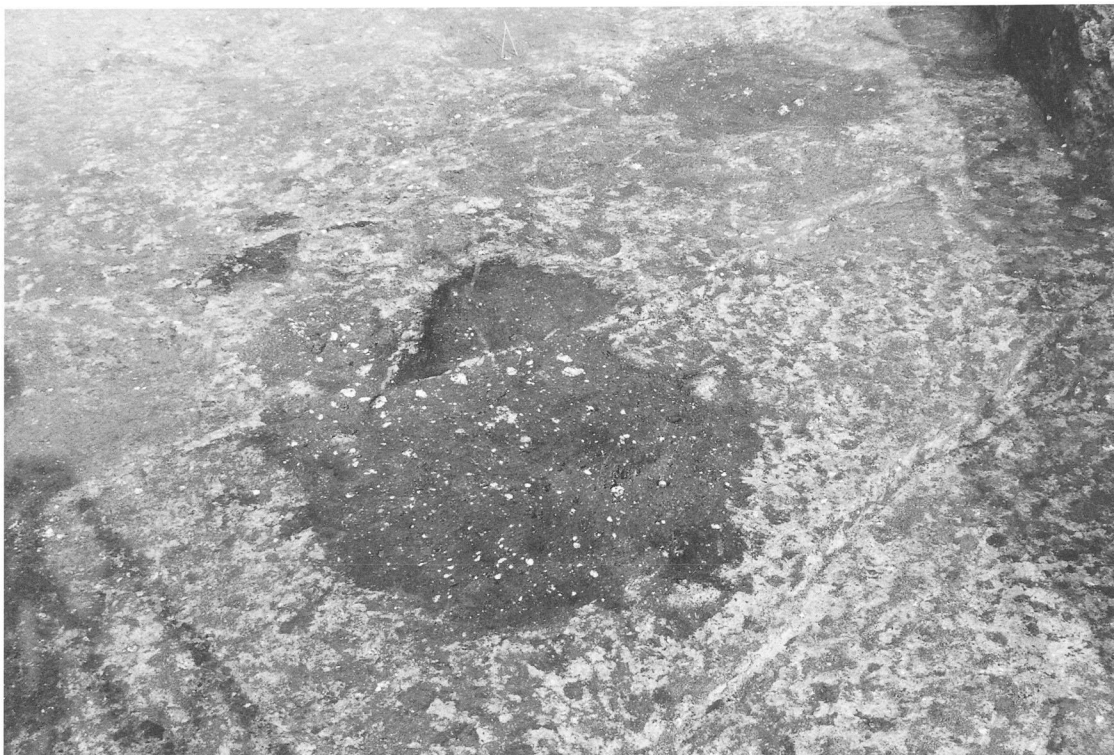
H1号住居址掘り方(南方より)



H1号住居址西壁中ピット



H1号住居址壁中ピット(北壁より)



H1 号住居址炉・灰検出状況



H1 号住居址炉主体部・灰



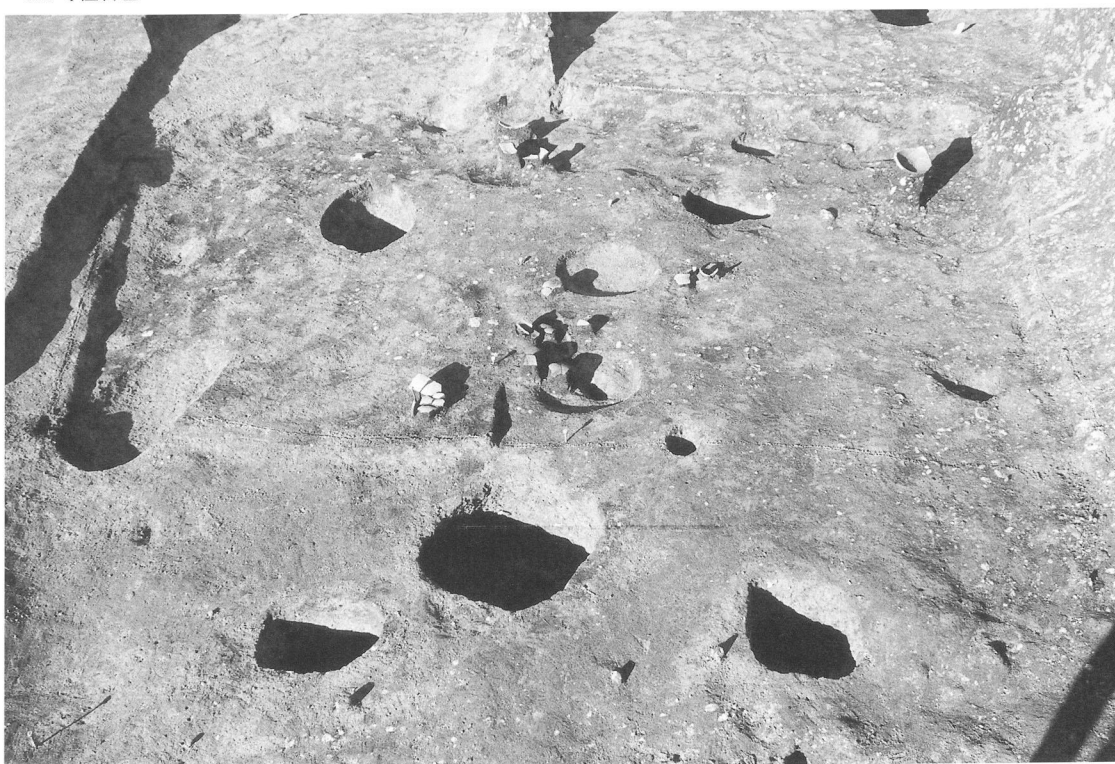
H1号住居址炉主体部



H1号住居址P5内遺物出土状況



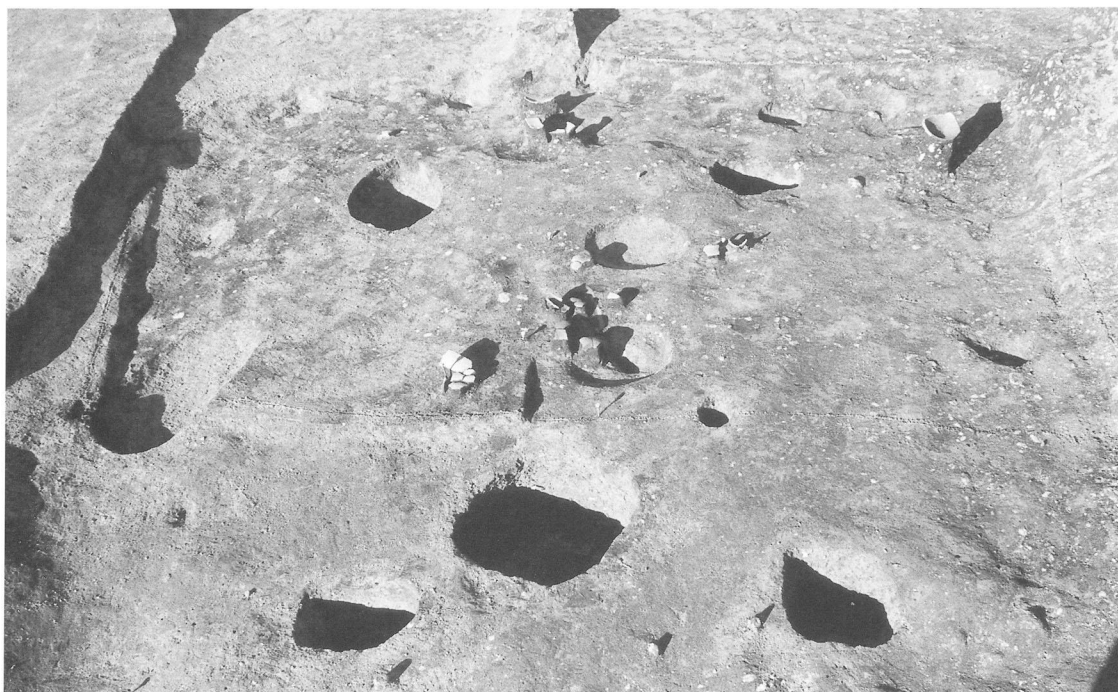
H2号住居址



H2号住居址遗物出土状况



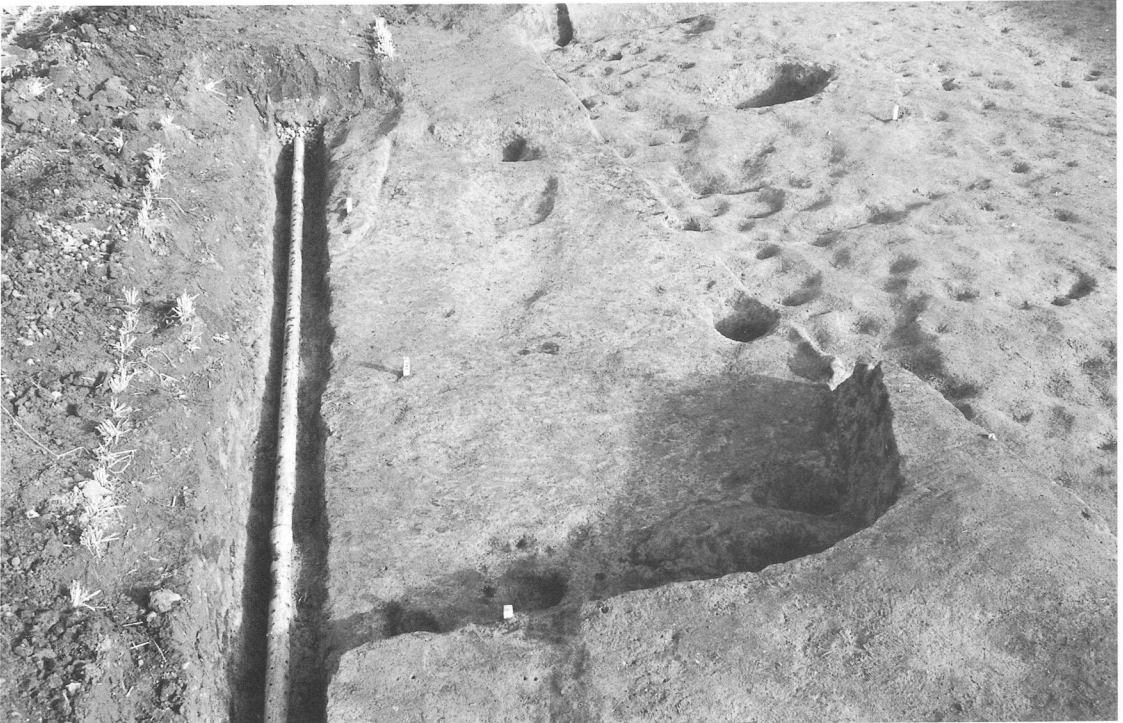
H2号住居址掘り方



H2号住居址炉1・2検出状況



H3号住居址



H3号住居址(南方より)



H3号住居址(北方より)



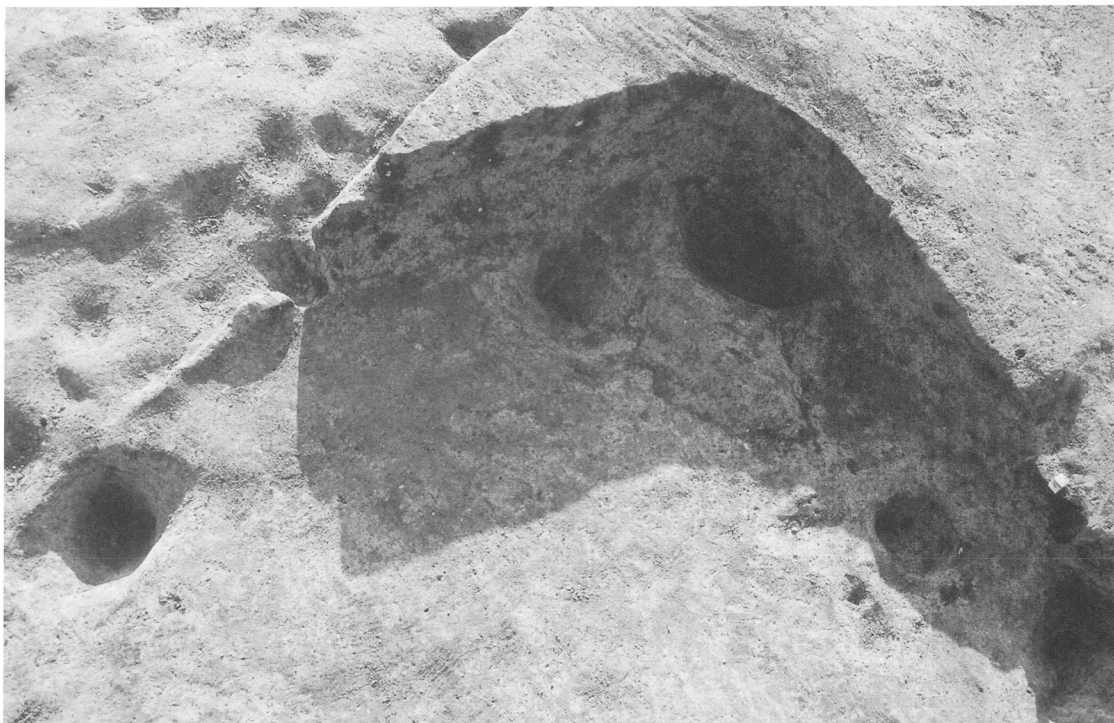
H3号住居址炉



H3号住居址炉



H3号住居址遗物出土状况



H3号住居址P4(貯蔵穴)付近



辻の前遺跡ⅡD1号土坑址



辻の前遺跡ⅡM1号溝址



辻の前遺跡Ⅱスナップ



中仲田遺跡Ⅱ



中仲田遺跡Ⅱ全体層序



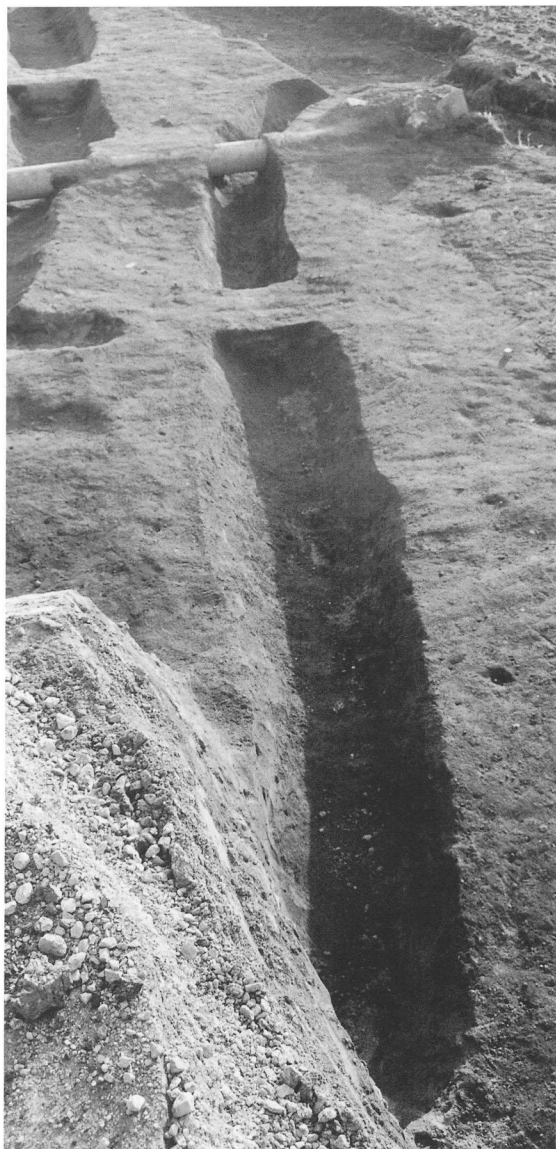
中仲田遺跡Ⅱ 全景



中仲田遺跡Ⅱ M1・M2号溝址



中仲田遺跡Ⅱ M1号溝址



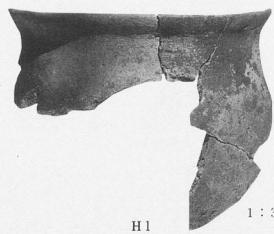
中仲田遺跡Ⅱ M2号溝址



H1 11-1



H1 11-2



H1 11-3



H1 11-4



H1 11-6



H1 11-7



H1 11-10



H1 11-8



H1 12-18



H1 12-16



H1 12-22



H1 12-19



H1 12-17



H1 12-21



H1 12-24



H1 12-20